
恋姫†侍 萌侍伝

時語り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十侍 萌侍伝

【Nコード】

N6063P

【作者名】

時語り

【あらすじ】

長い戦いが終結し、四国は平和の道を歩みだした。同時に、一刀のいる正史との繋がりができ、二つの世界を行き来することになった。ここにまた、新しい可能性の扉が開く。＊当作品は「恋姫十侍」の後日談です。先にそちらを読んでから、こちらを読む事をお勧めします。物語ごとに【現代】と【外史】に分かれており、【現代】では恋姫達の服装について明記していません。どうぞ、好きな服装を想像してお読みになってください。

新しい始まり（前書き）

戦いを終えた者達は歩みだす、平和の道へと。これはその道中の物語である。さあ、新しい扉を開きましょう。

新しい始まり

長い戦いは終わった。

大陸に生きる者達は王を中心に、平和な世を作るために動き出した。その影には己の存在をかけて戦った、一人の侍がいた。

最後の戦いを終えると同時に消えた侍だったが、大切な仲間達の想いによって帰還。

それどころか、外史の管理者より二つの世界を繋ぐ扉が、礼と侘びの意味で送られた。

この扉を越えるには、その先にある世界の言葉と一般常識を学ぶ必要がある。

そのこの辺りは扉の管理を任された、貂蟬と卑弥呼が講習会を開いてくれた。

さらに人数制限も設け、後は扉を越える権利について、四国会議の最後の議題として話し合うことになった。

「皆さん、何か良い案はありますか？」

すっかり調子を取り戻し、以前のような姿に戻った月。

今回の会議は都^との首都である洛陽で行なわれているため、開催地の王である月が議長。

第一回目の四国会議の議長として、堂々と振る舞っている。

「そうだな、やはり学び終わった者から規定の二名ずつ、順番に向かうのはどうだろうか？」

最後の戦いの後、正式に呉の王として家督を継いだ蓮華。

自由になった前王の雪蓮の振る舞いに頭を痛めつつも、彼女は彼女で真面目に政務を行なっている。

「それだと、国が違う者同士が組む場合があるわよ。出入り口は洛陽にしかないのだから、少々無理があるわ。やはり国別にはするべきよ」

資料を眺めながら意見を述べる魏の王、華琳。

部下で従姉妹の秋蘭が一刀の帰還で元気になって以来、彼女を閨に呼ぶ事はなくなった。

なんでも、落ち込んだ彼女をどうにもできなかった、自分なりの責任の取り方らしい。

同時に、一刀との再会を喜ぶ秋蘭の姿を見て、これ以上閨に呼ぶ気が失せたのもある。

「だったら、国別に分けて審査しますか？ それで、通った人には天の国の勉強っていう名目で、休暇を与えるんです」

しっかりとした意見を述べる、蜀の王である桃香。

最後の戦いの直ぐ後は義妹の死に嘆いたが、いつまでも泣いてられないと一念発起。

必死に勉強に取り組んで、前よりは少し王らしくなった。

最初はギクシャクしていた一刀とも、蜀の面々は既に真名を預けている。

「なるほど、俺の世界への留学ってことか。それは有りだけど、審査基準はどうするつもりなんだ？」

四国の王と対等に話すのは、帰って来た侍、北郷一刀。

議題が議題なので、この会議に限って四国の王と同等に話すことを許された。

ちなみに現在の一刀の立場は、董卓軍の正式な将であると同時に元

の世界の学生。

普段は学校に通い、帰り次第こっちで過ごす。

休みの日ともなれば、ほぼ一日中こっちの世界で過ごしている。

両親と祖父への説明は大変だったが、モチカラで記憶を見せると納得してくれた。

今では早く孫や曾孫の顔が見たいのと、嫁さん達に会いたいとせがまれている。

まったくもって順応性の高い家族である。

「え、ええっと。講習を受けた時間はどうでしょう?」

そこまでは考えていなかったのか、桃香が迷いながら提案をする。勿論、この程度では華琳によって却下される。

「駄目よ。どんなに講習を受けても、身についてなければ意味は無いもの」

「そうだな。ちゃんと身についてなければ、あの扉は越えられないらしいからな」

「でしたら、試験はどうですか?」

蓮華に続いて口を出した月の提案に、会議に参加している面々の視線が注目する。

「試験?」

「そうです。一刀さんの世界の学校という場所では、定期的に学んだ事を確認する、試験というものがあるんですよね?」

それを聞いて、頭の回る面々はこういう事が理解した。

要するにちゃんと身についているか試験をして、それで天の国に行けるかを決めようというのだ。

「それならば異論は無い。問題は貂蟬と卑弥呼に作ってもらえば、えこひいきも無いだろうしな」

「おまけにあの二人なら、買収される事もないでしょう。最も、そんな事をする者はいないでしょうけど」

「寧ろ、あの二人を買収する勇気のある人がいたら、是非会ってみたいよ」

『確かに』

買収しようと思われたら、間違はなく地の果てまでも追いかけられそうだ。

誰もあんな筋肉達磨達に追いかけて、「つかまえてごらんなさあい」という展開は嫌だ。

ある意味、究極の買収不可能審査員だ。

「国別に結果を出すのは当然として、後は何かありますか？」

「合格の基準はどうするの？」

それを決めなければ、本当に身についたかが分からない。

だからといって、満点にしては頭脳労働が苦手な面々が合格できない。

「そうだな、七割でいいんじゃないか？」

「根拠は？」

「残りの三割くらいなら、俺と一緒にいれば問題無いだろうし。それに、全部覚えなきゃ駄目って訳でもないしな」

確かにそれはそうだし、貂蟬と卑弥呼も似たような事を言っていた。ある程度は覚えてもらうが、足りない分は向こうで一刀に教われればいいと。

「なら、基準は七割以上ということで決まりだな。順番は、国別に点数の高い者順でどうだ？」

「それなら国別の優先順位は、各国の平均点にしようか」

「平均点？」

「国別の総合点を、受けた人に平等に分けるんだよ。一人が駄目でも、他が高得点なら一位になれるかもよ」

基準さえ決まれば、順番はスイスイ決まっていく。

結論としては、平均点が上の国から順に人を送れる。

ただし、試験で七割以上の点数を取れた者が点数順に二人一組で。一名余った、もしくは合格者が一名の場合は、その一名だけで行ける。

という事で話が纏まった。

「では次に、試験の時期と一度合格した人の扱いですが」

こうした調子で会議は進んで行き、二刻後によやく終わった。

それぞれに準備された部屋に戻って仲間に報告、一部の者は今日までに教わった事の復習に取り掛かった。

「はぁ、疲れたなあ」

「お疲れ様です。それで、今日はどうなるんですか？」

「明後日の日曜日までは休みだし、こっちに泊まるつもりだよ。親にはちゃんとやってあるから、問題ないよ」

返事を聞いた月の顔は溢れんばかりの笑顔。

これで少なくとも、明後日の夜までは一緒にいられる。

三日後には学校があるので、明後日には戻る必要があるが、それまでは共に過ごせる。

「それじゃあ、明日は一緒にお祭りを回りませんか？」

「うん、いいよ。俺も誘おうと思っていたんだ。よろしいですか、お姫様」

「はい！ では、楽しみにしていますね！！」

パタパタと駆けて行く月を見送り、大きく息を吐く。

この世界に戻ってきて数日、ようやく戻ってこられたという実感が湧いてきた。

あの戦いの後、一刀は元の世界に帰っていた。

目が覚めたら目眩を起こした公園に倒れており、時間を確かめると二時間も経っていなかった。

まるで向こうの一日が、こっちの一分であるように。

正直、あれは夢だったのかとも思い、「記」のモチカラで記憶を確認した。

そこで見たのは、確かに月達と過ごした日々の記憶だった。

あれは夢なんかじゃない、皆との記憶は偽物なんかじゃない。

それを実感した一刀は、まず自分の格好を「着」のモチカラで学生服に戻した。

そして足下に転がっていたシンケンマル、壊れかけの馬折神等を回収。

すぐに帰宅して、自分の部屋の壁に「繋」の文字を書き、向こうに行こうとした。

そこからは知つての通り、貂蝉と卑弥呼の手助けもあって二つの世界が繋がった。

後で時間軸の事が気になって貂蝉に尋ねるが、扉の開通と共に同じ時間を過ごすようになったらしい。

お陰でこうして、前のように皆と過ごす事ができる。

「これから、新しい可能性が始まるんだよな」

新しい外史の扉は開かれた。

二つの世界の繋がりをもって。

今ここに、新たな可能性の物語が再び始まる。

新しい始まり（後書き）

新しい扉は開かれた。その先に何があるか、それはまだ分からない。
物語はまだ、始まったばかりなのだから。

先鋒到着【現代】

先日、第一回目の現代知識試験が行なわれた。

各国の受験者が試験官の貂蟬と卑弥呼の下、天の国一番乗りを目指して試験に臨んだ。

ちなみ一刀には結果が伝えられておらず、当日のお楽しみという事になっている。

誰が来るのかを楽しみにしながら、一刀は現代の自分の部屋で眠りについた。

そして迎えた土曜日の朝、誰が来るのだろうと起き上がろうとしたら、左右に何かを感じた。

何だろうと確認すれば、右隣には月が左隣には風が寝ていた。

「……ちよつと待てええいつ！」

眠気が一気に覚めて飛び起きると、声に反応した月と風も起きた。

「うにゆう……おはようですよ、お兄さん」

「おはようございます、一刀さん」

「ああ、おはよう……。って、そうじゃなくて、なんでもういるの！」

今日誰かが来るのは聞いていたが、こんな朝早くとは聞いていない。時間だつてまだ七時を過ぎたばかり。

いったい何時頃にここに来たのだろうか。

「へう。だつて、楽しみで眠れなくて」

「二人でおめえの部屋に行ったら、卑弥呼のおっちゃんが「日にちが変わったから、行つていいぞ」って言ったんだぜ」

眠りかけている風ではなく、頭の上の宝慧が説明をする。

要するに日付が変わる頃にこっちに来て、そのまま布団に潜り込んで寝てしまったと。

どこの遠足や運動会前日の小学生だと言いたいが、言ったところで理解してもらえない。

向こうには遠足も運動会はまだ無く、小学生ですらないのだから。

「はあ、分かったよ。じゃあちよつと着替えるから、部屋の外で待ってて」

「は、はい！」

脱いだ靴を手に、慣れない手つきで障子を開けて部屋を出る。

この辺りは、しっかりと勉強しているのが窺える。

「にしても、一番手が月と風か」

あの二人が来たという事は、平均点トップが都で、さらに都の個人成績で月と風が一位二位という事。

風はまだしも、まさか月が上位に入るとは予想できなかった。

なにせ都には風の他に、詠を筆頭に稟や七乃、ねねという軍師がいる。

正直、都代表の一番手としては詠が本命、風と稟、七乃が対抗馬だと思っていた。

ちなみに大穴は華雄と恋。

「まあ、予想通り詠が来るよりは少し嬉しい」

「きゃあああつ、かつわいいっ！」

独り言を遮って響いたのは、ある女性の歡喜の声。

その声に溜め息を吐いて部屋を出ると、月と風が一刀の母親に抱き締められていた。

「何やってるのさ、母さん」

「あら、おはよう一刀。それよりも、この子達が例のお嫁さん!？」

爛々と輝く目でこっちを向く姿は、まるで玩具を与えられた子供のよう。

こんな母親が北郷家十七代目当主だったとは、とても思えない。というより、引退して自分に後を譲ったからかもしれないが。

「まあね。それより、放してあげなよ。二人共混乱しているからさ」

一刀の言う通り、いきなり抱き締められた月と風は、訳が分からず混乱している。

もがきながらへうへう言っている月に、現実逃避して眠りこける風。本当はもう少し見ていたが、人でも物でも可愛いものに目が無い母親は止めなくては。

「ええ？ もうちょつとお願い」

「朝飯の準備が遅れて爺ちゃんに何言われても構わないなら、どうぞ好きなように」

「すぐに行くわね!」

さすがの母も十六代目当主で父親、一刀の祖父に当たる人物には勝てない様子。

素早く二人を解放して、台所へと駆けて行つた。

「うちの母親が悪かったね。どうも可愛いものには目がなくてさ」
「い、いえ、気にしないでください。それに……お義母様に気に

入られるのは、悪い気分ではありませんから」

頬を赤くして両手を添え、早くも義母宣言をかます月。

いつの間にか目覚めた風も、後はお義父様とお爺様に気に入られるだけですと呟いている。

気に入られるも何も、早く会わせると催促を受けているのだが。

「ともかくさ、朝飯まだだろ？　一緒に食べようか」

「は、はい！」

「はあい」

こうして朝食の席に向かったのだが、そこで待っていたのは父親と祖父だった。

祖父は、これで十九代目当主も期待が持てると騒ぎ、婿養子の父親は二人の姿に関心を示す。

それでも父親は学生時代、世界史を学んでいて三国志は特に気に入っていた。

なので、別世界の董卓と程？がこんな少女だなんて、と興味津々だ。

「はああん、こんな可愛い子達がうちの息子の嫁に来てくれるなんてえ」

「さすがはわしの孫じゃ。よお女子にモテるわい」

「といつても、こつちで嫁にできるは一人だけだぞ、一刀」

「父さんに言われなくとも、それくらい分かってるって！」

なんとも賑やかな様子に、月と風もすぐに馴れたんだ。

くすくすと笑いながら、用意された食事に手をつける。

味は平気かと心配する母親に二人が美味しいと答えると、先ほどのように抱き締められた。

その上で、これで味覚の違いで喧嘩することは無いわねと、早くも

余計な心配をしてくれた。

「ところで、今日はどうするの？ どこか出かけるの？」

興味津々に尋ねる母親だが、行き先を決めるのは一刀ではない。試験後に行きたい場所を選ぶよう、参考になりそうな雑誌を受験者に差し入れた。

数人で一冊を読むことにはなるが、それでも充分な資料になりうる。

「その事なんですけど、この辺りを散歩するだけで構いません」
「風も同じなのですよお」

食後のお茶を啜りながら、二人揃って同じ意見を伝える。

「いいの？ 資金は貂蟬からたくさん貰ったから、遠慮する事はないの」

二つの世界が繋がった後、貂蟬がこつちの世界を案内するのに使えと、キャッシュカードをくれた。

一度確認してみたら、尋常でない金額が表示された。

あまりの金額に驚きつつ、取り敢えず今日のために五万円ほど下ろしておいた。

「どこかに出かけるのもいいんですけど、一刀さんが生まれ育った街が見てみたくて」

「それに、風達にとっては見る物全てが珍しいですから。この辺りだけでも、充分楽しめると思うのですよ」

確かにそれはそうだし、お金もあまり掛からないから助かる。しかもこの辺りなら、はぐれて迷子になる恐れも無い。

「分かった。それじゃあ出かけようか、と言いたところだけど」
湯飲みを置いた一刀は、シヨドウフォンを取り出して母親に差し出す。

「その前に着替えなくちゃね。母さん、任せるから好きに着せちゃつて」

「あら、いいの？ やった、一度女の子を着せ替え人……コーディネートしてみたかったのよね」

嬉々としてシヨドウフォンを受け取る母親。

だが、一度着せ替え人形と言いつうになつたのは、少し気になった。思い起こせば幼い頃、一刀も着せ替え人形よろしく、ミニファッションショーをやらされた事がある。

「ははは、母さんは裁縫とか服飾とかが好きだからなあ」

暢気に笑う父親は、長年の付き合いで既に分かっている。
ああなつた妻は止められないと。

「さあて、どんな服を着せようかしらねえ」

「えっ？ えっ？」

「おおう、強引ですねえ」

戸惑う二人を脇に抱えて自室に連れて行く母親。

あれが本当に一昨年十七代目を引退した、現在普通の主婦の姿なのだろうか。

これで少なくとも一時間は掛かるなど、すぐの出発を諦めて祖父との稽古で時間を潰す事にした。

その一時間半後、ようやく一刀と月、風は外に出られた。

「へう……。一刀さんのお母様、沙和さん並に凄いです」

「いやいや、あれに比べれば沙和ちゃんはまだマシなのですよ」

延々と「着」のモチカラで着せ替えをさせられた二人。

あまりの凄まじさに、出かける前に疲れてしまった。

「悪気は無いんだよ。悪気はね」

寧ろ悪気がないからこそ、性質が悪いかもしれない。

「それにしても……」

周囲を見渡せば、見たことも無い素材を使った家や建築物。

子供達が遊んでいる場所にある、数々の遊具。

そして舗装された道路を走る多種の車、バイク、自転車に原付。

立ち並ぶ店やコンビニ、その傍に設置してある自動販売機。

どういう物かは教わったが、こうして直に見るとまた違う。

「あれが天の国のカラクリ、機械ですか」

「お兄さん、お兄さん。ここは一つ、使う所を見せてくれませんか
ねえ」

「使う所か……。じゃあ、あれでいいか？」

指差した先にあるのは、どこにでもある自動販売機。

財布から硬貨を取り出して料金を入れ、どれを押そうか迷う。

商品名を言っても何か分からないだろうし、そもそも味を知らない。
だからといって説明するのも大変なので、取り敢えず消去法で決める事にした。

季節柄、暖かい物でも冷たい物でも問題は無い。

刺激の強そうなコーヒーと炭酸は避け、取り敢えず紅茶とジュースを選ぶ。

自分用には、どちらかが飲めない場合の保険としてお茶を選択する。

「ほおほお、そこにお金を入れて欲しい物の下にある、そのでっぱりを押すのですか」

「そういうこと」

購入した缶を手渡し、開け方をレクチャーして飲んでみてもらう。

「おおう、甘い飲み物ですえ。これは不意を突かれましたねえ」

「お茶……ですよね？ 嗅いだことの無い匂いですけど、これはこれで美味しいですね」

どうにか気に入ってもらえた様子に、一刀もほつと胸を撫で下ろす。そのまま付近の公園に入り、ベンチに座って遊ぶ子供達を眺める。どの時代でも、楽しく遊ぶ子供の笑い声は変わらない。

「平和なんですね、こつちの世界は」

「そんな事はないよ。こつちにも犯罪はあるから」

「ですが、風達の生きていた世界に比べれば、ずっと平和なのですよ」

平和である時間はどちらの時代も変わらない。

だが、根本的な平和の意味は少しだけ違う。

この世界の平和のあり方について学ぶ事、それが外史を平和に導く足がかりになるかもしれない。

「こつちした世の中をみていると、私達はまだまだですね」

未だに残る争いの火種。

それらが燃え広がる前に刈り取り、争いをすべきという連鎖を断ち切ってきた。

それでも火種はどこかに現れ、各国がその対応に走る。

国同士での争いがなくなった分、被害は相当減ったが、まだどこかで血が流れている。

それを限りなく少なくするためにも、現代から学ぶものは多いはず。単純に遊ぶのもいいが、未来の平和を知りそれを向こうの平和に繋げる。

ひょっとしたら、あの扉はその期待も込められた上で、与えられたのかもしれない。

「正直、迷っていたんです。あれ以上、どうすれば平和になるのかなって」

自分達にできそうな事は、可能な限りやってきた。

争いの連鎖を断ち切るという理想の下、国クラスでの争いは終結。各国が平和のために動き出し、大陸の中での争いは減った。

蜀の仲介によつて、南蛮とも手を取り合えた。

それでも、まだ五胡に対する警戒は怠れない。

他にも小さな争いがある以上、まだ全ては終わっていない。

「それで、何か解決策は思いついた？」

「はい！ 全てを私達の代で終わらせようなんて、おこがましいことだと」

どこかすっきりした表情で空を見上げ、紅茶を啜って語り始める。

「意地になり過ぎていたんです、私達が全てを終わらせるって。で

も、それは傲慢でした。私達にできるのは、今やれる事をしっかりとやって、次代にそれを託す。そうした、平和の足がかりを作ることだって」

一時の平和など、時が経てば簡単に崩れる。

だが平和への想いを繋いでいけば、時代に合わせた平和な国が続く。争うときは争ってしまうだろうが、大事なのは意思を伝え続けること。

何十年、何百年先になろうとも。

「月ちゃんの言うとおりですねえ。風達はちょっと、焦りすぎていたかもしれません」

いつもマイペースな風にそう言われると、妙に納得できる。

目には見えなくとも、風も理想のために駆け足をしていたのかもしれない。

それがわかっただけでも、こっちの世界に来た甲斐があった。

「そうと分かれば、今日は思いつきり息抜きしようか」

「はい！」

「ふにゆう……すいよ、すいよ」

「って、いきなり寝るのかよ！」

息抜きには違いないが、いきなり寝られても困る。

まだこの辺りを全て見せていないというのに。

一刀に腕に寄り添って眠る風を起こそうとすると、今度は膝に重さを感じた。

視線を落とせば、ニコニコと笑う月がおやすみなさいと瞳を閉じている。

「……マジか」

朝が早かったせいもあるだろうが、二人はぐっすりと眠ってしまう。正直、ご近所さんの目が少し気になる。だがそれ以上に、理性が揺るがないかが困るところ。

「どすりやいいんだよ……。でもまあ、疲れていたんだよな」

激務と勉強の日々を乗り切り、ようやく掴んだ一番手の来訪。色々と大変だったのだろう、寝顔が随分と穏やかだ。

「ゆっくりお休み。時間はたっぷりあるからさ」

こうして、恋姫達と現代の交流は始まった。

より良い世の中を目指し、学ぶため。

知らない世界を楽しむために。

新たな可能性の扉は、まだ開かれたばかり。

おまけ

日も落ちて夜になった夕食後。

テレビや電気に感心する月と風に、洗い物を終えた母親が問いかける。

「月ちゃん、風ちゃん、今日は泊まっていくの？」

夕飯の後の母親の問い掛けに、どうしようかと二人が迷う。

ちなみにこちらの世界では、姓と真名で名乗る事が会議で決まっている。

つまり、月は董月^{とうげつ}で、風は程風^{ていふう}となる。

勿論、こっちにくれば他も同様の名前で呼ばれる。

最初は真名をいきなり名乗るのは、と反発する者もいた。

向こうでは下の名前が真名に当たると説明し、説得を続けてどうにか了解してもらえた。

何せこっちの世界で、劉備や曹操と名乗るわけにはいかないのだから。

笑い飛ばされるならまだしも、下手をすれば通報されかねない。

なので、武器の持ち込みも禁止している。

「遠慮しなくともいいんじゃぞ。二人くらい、どうという事もないわ」

「そうそう。大丈夫だって、ちゃんと寝所は一刀の部屋に用意するからさ」

父親の発言に一刀はお茶を吹き出し、月は顔を真っ赤にし、風は驚いて眠りについた。

「起きろ！」

「おおう、あまりの衝撃発言につい」

「へっ、へうう……」

息子達のやり取りに笑いつつ、勝手に準備を進める両親。

布団は一つでいい、モチカラで防音はしっかりしておく、新品のティッシュ箱を用意しておけ。

あからさまに孫を期待するかのような両親に、祖父は何も言わない。彼もまた、早く曾孫の顔が見たいのだ。

「だああっ！ 頼むから、そっいうのは止めてくれえー！！」

静かな夜に、
一刀の悲鳴が木霊した。

先鋒到着【現代】（後書き）

第一陣として現れた月と風。

焦り過ぎていた彼女達は、ようやくその事に気づき、一時の休息を過ごすのだった。

軍師世界を知る【現代】

昨日の土曜日は月と風が現代にやって来た。

二人は泊まる事無く、夜の十一時くらいに向こうへと帰った。

そうなる当然、次に来るのは試験で都の三位と四位の人。

誰だろうかと考えながら就寝した翌朝、身支度を済ませて居間に行く。既に来ていた。

「あつ、やっと来たわね」

「おはようございます、一刀殿。お先にお邪魔させてもらっています」

今日は予想通りというかなんというか。

都を代表する軍師の詠と、一刀との仲では古株に入る稟。

意外性で月と風が一番手というのも良かったが、定番も定番で魅力がある。

「いつ頃来たの？」

「確か、時計なるものがこう……縦に一直線になっている頃です」

「六時か。月と風ほどじゃないけど、早いな」

ちなみに一刀の基本起床時間は七時から七時半。

休日でもこれを守っているが、それでも詠と稟の方が早い。

「そんなに楽しみだったの？」

「ち、違っわよ！ 帰って来た月が楽しそうに話すから、早く行ってみようだなんてことは」

誤魔化そうとしているが、本音が思いつきり漏れている。

目が合った稟も、暴露した通りだと苦笑いを浮かべる。
やっぱりなと思いつつ、一刀は二人の服装に目を向ける。
あっちの世界とは、明らかに異なる姿に溜め息を吐いた。

「俺の母親に捕まって、着せ替えさせられた？」

「そうよ、まずはそれについて文句を言ってやろうと思っていたのよ！」

「詠殿、少しは落ち着いてください」

稟が宥めようとしているが、天性のツン子な詠は止まらない。
縁側で庭を見ていたら、急に抱き締められて連れて行かれた。
やっと解放されたと思ったら、何度も着せ替えられて。
ついさつき終わって、ようやく一息ついていたそう。

「道理で俺のシヨドウフォンが、枕元から無くなっている訳だ」

おそらくは勝手に持って行って、着せ替えのために使っていたのだろう。

ご丁寧に一刀の座る席の所に置いてある。
ちよっと借りたわよ、という母親のメモ付きで。

「ふおっふおっふおっ、今度は賑やかな子が来たのお」

「どちらも利発そうない子じゃないか。我が息子ながら、よくやったもんだ」

気楽そうに笑う父親と祖父。

両者とも詠と稟を気に入って貰えたのは嬉しいが、せめて止めて欲しい。

「ところでさ、二人は行きたい場所とかあるの？」

何とか話題を変えようと、今日の予定を決める事にした。
二人の事だから、図書館のような場所を希望するだろうと思っていた。

ところが二人の指名先は。

「別に無いわ。しいて言うなら、この家の中」

「こっちの世界の道具について、もっと学びたいと思っていました」

最低限の知識は教わったとはいえ、実際に使っている所は見たことが無い。

昨日の月と風に教えた家の中の道具は、テレビと電球だけ。

後はトイレについても教えたが、他の器具は詳しく触れなかった。

「じゃあ、食事が終わったら家を案内するよ」

「頼むわね」

「よろしく願います」

了解の返事を聞くと、そこへタイミングを見計らったように母親が現れる。

朝食をお盆に乗せて次々に運び、詠と稟にも食事を勧める。

そこで稟が、準備が大変じゃないかと聞いてみると、母親は笑って答えた。

逆に作り甲斐があつて燃えると。

「どんどんおかわりしてねえ」

上機嫌に台所に戻る後姿を見送り、居間にいる北郷家の男達は同じ意見を心の中で呟いた。

この料理好きがと。

その後、一通りの器具の説明をして一刀の部屋へと場を移した。

「取り敢えず、これなんかどうかな？」

誰かが知りたがるだろうと思って用意した、地図帳や歴史に関する本、その他教材の一部を並べる。

本格的に学校を作ろうという意見が出た頃から、参考になればと、例のキャッシュカードで下ろした金で購入しておいた物だ。

「こつちが小学校、所謂六から十二歳の子が学ぶ場所で教える事」「どれどれ？」

説明を受けながら教材を手に取り、パラパラと捲っていく。
稟が国語、詠は算数の教材を見ている。

ある程度読み終わると今度は手持ち交換したり、他の教材を読んでみたりと、しばらくの間部屋は静寂に包まれる。

「なるほど、学ぶにあたって基礎の基礎から教え込むのね」

「そこから徐々に発展させた学問を教えていくのですか。考え方としては、いいかもしれません」

「学ぶ物の種類が多いのは、将来的に進む道を多数用意するためなのね」

それぞれで分析をしながら、討論をする詠と稟。

家の中を散策している時とは違って、すっかり軍師の目になっている。

ついさっきまで、コンロや冷蔵庫に一喜一憂していたとは思えない。

「あらゆる道を準備した上で、多様な基礎を教えるのに時間が掛かるのは仕方ないわね」

「ええ。こちらの義務教育でしたっけ？　少なくとも九年は学ぶ場
にしなければなりませんから」

これが向こうに合うかと聞かれれば、否という答えが出るだろう。
向こうの世界では、早いうちから家の手伝いをするのは当然。

そんな労働力たりうる人々を、九年も学問を学ばせるのはほぼ不可
能。

これならばまだ、以前より実行している専門学校の方が合っている。

「俺も普通の学校は早すぎると思うよ。だから、他国に広げるなら
専門学校がいいと思う」

一刀からの意見に、二人は文句を言わずに頷いた。

確かに学校は興味深いし価値はあると思うが、時代が早すぎる。

仮に大幅に内容を変えて実行するにしても、時代に合わなければ意
味が無い。

「こればかりは仕方ないわね。今度の会議で、正式に学校計画の
中止を伝えるわ」

「参考資料に、こちらを頂いてもよろしいでしょうか？」

「いいよ。元々あげるつもりで買ったんだし」

何かの役に立てればと、昔使っていた参考書も加えて差し出す。

その中にある一冊の教材に目をつけた詠は、それを取って広げてみ
る。

「ねえ、何この地図。こんなの見たことがないんだけど」

詠が広げているのは、昔懐かしい地図帳。

世界地図はもとより、世界各地の地図が載っている教材だ。

「世界地図っていつてね。地球にある陸地を書いたものだよ」

「地球……。ああ、卑弥呼殿に教わった、我々が立っているこの星の事ですね」

あれには驚きましたよと、地球の事について教わった講習を思い出す。

一緒に講習を受けていた都の面々どころか、呉、魏、蜀の面々も驚きを隠せなかった。

自分達が立っている場所が、平地ではなく球体なのだと教わったのだから。

直後に飛ぶ質問の嵐にも見事な返答をされ、一同は納得するしかなかった。

「あの時は地球について教わっただけだけど、陸地ってこんなにあるのね」

興味深そうに眺めていたが、ここである事に気付いた。

「ねえ、僕達がいる場所ってどの辺りなの？」

「向こうの世界の事？ それだったら」

机の上からマジックを持って来て、広げた世界地図の中国を囲う。さらにそれを国ごとに四つに線で区切って見せる。

「ここ。ここがついこの間まで、領地を争っていた大陸だよ」

「なっ！？」

「ちよっ、ええっ！ たったこれだけなの！？」

国別に見れば大きな国だが、陸地だけという観点で見ればまだまだ

小さい。

他にも陸地はあり、自分達がいる陸地もまだずっと遠くまである。さらに都の国の大きさがこれくらいだと教えると、二人の口は開いたまま塞がらなかった。

「ま、待ちなさいよ。じゃあ大陸制覇なんてものを目指すなら、これ全部を治めなくちゃいけないの!？」

昔、華琳が目指していた天下。

それは大陸制覇。

だがそれは、彼女が知っている中国大陸の事だけ。本当の意味で大陸制覇をするなら、ほぼ世界の半分以上を治めることになる。

「む、無理ですよ、こんなの」

「じゃあ何？ こっちの南蛮、こっちには五胡。その先には、まだこんなに陸地があるって事!？」

自分達の領土の比べ、果てしなく広い大地。

これをあの時代で一人の王が治めるなど不可能だ。

「これを華琳に教えたら、どんな反応をするかしら」

「ううん。ちよつと興味あるな」

「桂花殿は、私と詠と同じ反応をするでしょうね」

未来だからこそ知りえた知識だが、あまりにもショックが大きい。自分達は四国が協力して、広い大陸を守っていると思っていた。ところがその広さなど、世界全体で見ればまだ狭い。知らなかった事とはいえ、あまりに衝撃が大きかった。

「これを見ていたら、今までの世界観がひっくり返りそうよ」
「同感です。なんだか頭痛がしてきました……」

頭を抱える二人に苦笑いを浮かべながら、休憩しようと地図帳を閉じる。

これ以上やったら、本当に頭が爆発してしまいそうだ。

「これが世界なのね。穏じゃないけど、随分と刺激的だったわ」

「刺激的にも程があります。休む暇がありませんよ」

「まあ、向こうの世界観じゃ無理もないよ」

ぐったりとしている様子の詠と稟。

これがもしも穏だったら、間違いなく発情していただろう。
ある意味、教えるのがこの二人で助かった。

「時代が違い過ぎるからね。さすがに千八百年は大きいよなあ」

大きいものにも、十八世紀も時代が違う。

一世紀でもだいぶ違うというのに、十八世紀では違いすぎる。

「取り敢えず、これはもう使わないし。持って行っていいよ」

「ありがたく頂戴します」

まだ困惑気味の頭で稟が貰った教材を見ると、明らかに違う雑誌が一冊混じっていた。

使わなくなった教材の間に挟まっていたそれは、健全な男子なら持っている雑誌。

表紙だけでは内容が分からない稟が適当なページを開くと、次の瞬間に血の雨が降った。

「……ぶはっ！」

現場にいた一刀と詠は後にこう言った。

人は鼻血を出す勢いで、後頭部を床にぶつけられると。

「つて、それどころじゃないわよ。稟、稟！」

「いったい何を……つて、これ無くしていたと思った俺の秘蔵本じゃないか!？」

「秘蔵本つてどんな……。アンタねえ、月や皆がいるくせにこんな物を――！」

「わあ、待てつて！ 健全な男子としてはこれが正常な、というより稟があ――！」

ドタバタと騒ぐ様子に、居間で寛いでいる両親と祖父は和やかに会話する。

「賑やかじゃのお」

「仲が良くてなによりね」

「これなら、孫も期待できそうだな」

まったくだと祖父が呟き、三人揃って笑い声を上げる。

一方で記録的な鼻血の量を計測した稟だが、どうにか処置が間に合っ

つて一命を取り留めた。

とはいえ、後頭部を打ったので布団の上で鼻にティッシュを詰め、横になっている。

流れ出た血も全て拭き取り、ようやく騒ぎが収まった。

「ああ、疲れた」

「原因はあんたでしょうが。この色情狂」

それは言い過ぎじゃないかと苦笑いを浮かべると、心当たりについて返される。

主に向こうで過ごしていた間の、夜の生活について。

どこで調べ上げたのか、次々と暴露していく。

風と稟の二人を同時に相手にした、星は下着無しで一日を過ごさせた。

外で霞とした事や、水浴び中に恋としたことまで。

終には月との情事まで、震えながら怒りの籠った口調で喋りだす。

あつという間に一刀のライフはゼロになり、詠の情報網の恐ろしさを改めて味わった。

「……すんまそん」

「分かればよろしい」

「……………はい」

こうなつては言い返す術は無い。

大人しく謝ると、ようやく暴露は止まった。

今後、今のような事になったら永遠にこのネタを使われるだろう。そう一刀は悟って、二度と詠には逆らわないと決めた。

「だいたい、なんで私にはまだ……………」

隠すように小声で呟いた言葉は、残念ながら一刀の耳には届かない。ツンに対してデレを上手く扱えない、微妙に残念な子の詠だった。

「何か言った？」

「別に！」

どこまでもツンでしかいられない、詠の悪い癖だった。

「ところでさ、これなんだけど」

ぶしつけに詠が取り出したのは、歴史の教科書。
それもここ百年辺りの歴史のページ。

「……酷いもんね、私達の時代から千年以上経っても争いがあるだなんて」

戦争についての話は、以前に月を通して聞いたことがあった。

だがこうして実際に歴史の本を読み、写真に目を通せば現実味を帯びてくる。

今では平和に見えるこの国でさえ、最後の戦いからまだ百年も経っていない。

「正直、月から聞いたアンタの話だけじゃ何とも言えなかったけど、こうして見るとよく分かるわ」

時を重ねて強くなる武器。

規模が違いすぎる戦闘。

唯一変わらないのは、尊い命が犠牲になるという点だけ。

乱世を生き抜いている詠でさえ、やりきれない気持ちになる。

「ねえ、僕達の世界もいずれ、こうなるのかしら？」

「分からない。俺の世界と繋がって、全く未知の道を歩み始めたからな」

あの外史の未来を予想することはできない。

あらゆる可能性がある以上、同じ道を歩む可能性も。

「だから、今やるべきことをちゃんとやるんだ。争いは何も生まな

い、やってはいけない事だって、次の世代にちゃんと伝える。今の平和がずっと続くようにね」

これは月も言っていたこと。

自分達だけで全ては終わらない、だから次の世代、その次の世代に延々と継がせる。

それが正史と同じ道を歩まずに済む、新しい可能性を生む手段と信じて。

「……気が遠くなる話ね」

「けど、やるしかないんだよ。俺達が手にしている平和が、ずっと続くようにね」

話を終えて静寂する部屋に、外にいる鳥の鳴き声が聞こえる。

慌しい毎日もいいが、黙っていればこうして静かな時を過ごせる。

こんな平和こそ、自分が求めていたものじゃないのか。

そう詠は感じ始めた。

「仕方ない。僕も協力するわ、その話」

軽く微笑んでの発言だが、その言葉に一刀が驚く。

「ちょっと、何よその顔」

「いや、だって詠がそんな事、言ってくれるとは思わなかったから」

「僕が言っちゃおかしい？ 僕だってねえ」

「ちょっと待ってください、詠殿」

言い返そうとする詠だが、その肩に復活した稟の手が置かれる。

何かと振り向けば、眼鏡の位置を直しながら稟が口を開いた。

「一刀殿は次世代に想いを繋げると言いました、そして詠殿はそれに協力すると」

それがどうしたのかと最初は思ったが、段々と事を理解し始めた。微妙に固まりながら汗を垂らす詠に、稟がとどめを刺す。

「つまりそれは、詠殿も一刀殿の子を産むという」

「言うなあああっ！」

急に恥ずかしくなった詠は、近くにあった枕を稟の顔に叩きつける。さらにやつとデレてくれたかと喜んでいる一刀に、教科書や参考書を投げ飛ばす。

再度騒がしくなった一刀達に両親は、喧嘩するほど仲が良いと言って暖かく見守った。

「あんななんか、あんななんかまだ認めてやらないわよお」

「まだって事は、いずれ俺のことを認め」

「黙れえっ！」

早すぎる夫婦喧嘩が治まるのは、一時間後のことだった。

軍師世界を知る【現代】（後書き）

本当の世界の広さを知った詠と稟の軍師二名。
次は【外史】編をお送りします。

他国の来訪者【外史】

週二日の現代訪問の第一回目が無事に終わり、今日から五日は平日の流れで進んでいく。
学校が終わったら扉を越えて外史に向かい、將軍としての仕事をする。

「一刀さん、引継ぎの書類がようやく纏まりました」

「アニキ、これ隊長会議の報告書」

「分かった。斗詩はその書類をねねに回して来て。猪々子、その報告書を見せてくれ。確認するから」

現在の一刀の主な仕事は、警邏隊の統括。

折神侍達がいなくなったため、引継ぎと新しい隊長、副隊長の選抜と、やることがたくさんある。

さすがに斗詩と猪々子だけでは手が回らず、一刀が警邏隊に司令官として一時的に復帰。

落ち着くまでの間、警邏隊に関する仕事を受け持つことになった。

「アニキが手伝ってくれて助かったぜ。アタイ達だけじゃ、追いつかなくてさ」

「まだ就任して日も浅いんだし、仕方ないさ。それより手を動かせ、手を」

消滅した折神侍達は帰ってこない。

もう一度作るとは可能だが、以前の記憶も経験も無いため、逆に手間が増える。

なので、再度折神侍達を作る事は断念して、こうして三人で仕事に取り組んでいる。

「書類、回して来ましたあ」

「ありがとう。取り敢えず、これで一段落だな」

「ふいい、疲れたあ」

ようやく処理した書簡の山を整理し、ぐったりとする三人。

猪々子は卓に体を預け、一刀は椅子の背もたれに寄り掛かり、斗詩は息を吐いて肩を揉む。

そんな静けさに包まれた部屋に近づく、二人分の足音。

まさかまた仕事が届くんじゃと、視線を向けると同時に扉は開かれた。

ただし、そこにいたのは仕事を届けにきた誰かではない。

「やつほお、一刀。遊びに来たわよ」

勢いよく扉を開いて現れたのは、元孫呉の王、雪蓮。

今は一人の将として働いているが、王を辞めたせいか以前以上にフリーダムになってしまった。

一刀が帰ってしまった時は自棄酒で体を壊しかけたが、一刀の帰還と華佗の治療ですっかり良くなっている。

最近では、もう王じゃないから両国の友好の証になると言って、宴の中で一刀への嫁入り宣言をした。

これを月達も笑顔で承諾し、妻となる人物の中に名を連ねる事になった。

「雪蓮殿、違うだろう。我々は仕事で来たのだぞ」

雪蓮に続いて現れたのは、曹魏の重鎮が一人、秋蘭。

帰還後に開かれた宴の余興も兼ねて一刀と姉の春蘭が戦い、見事に一刀が勝利。

それにより、彼女も一刀の妻の中に名を連ねる事になった。

「いいじゃない別に。せつかく都に来たんだし、少しくらい遊んだって」

「そうもいかないだろ。蜀から派遣された人が来たら、仕事が山ほどできるぞ」

この二人がそれぞれの国から来た理由は、四国間での交流のため。各国が他の三国に人員を一名派遣し、交流と派遣先の政等を学ぶ事を第一としている。

同時に四国間で情報交換を行い、たまに出没する賊や五胡への対策を話し合う。

都からは霞が蜀、一人で放っておけないからと七乃が美羽を伴って魏、星が呉へと派遣された。

ちなみに美羽がやっていたセキトの世話や、文官の手伝いは全て麗羽が受け持ったため、たまに悲鳴が聞こえる。

「ええ、やあだあ。せつかく一刀に会いに来たのに、仕事なんてしたくなあい」

今回の派遣も、決して蓮華が雪蓮を選んだ訳ではない。

会議で代表を決める際に自推し、あれこれ言って上手く権利を入手したのだ。

「でも、一刀が今夜閨に誘ってくれるなら、考えてもいいかなあ？」
「なっ!？」

「雪蓮殿、悪いが他国一番乗りは譲れんな。姉者公認になった以上、手加減するつもりは無いのでな」

「秋蘭までっ!？」

突如勃発した閨取り合戦に、ノリノリで応援するのは猪々子だけ。斗詩はどうしようかとオロオロし、話の中心にいる一刀も気まずい顔をしている。

このままでは拙いと踏んだ一刀は、おそろおそろ手を上げて発言する。

「その……悪いけど今日は先約があるんだ」
『なにい！』

先約という二文字に雪蓮と秋蘭が過剰に反応する。

現在都には霞と星がないので、残る相手は月、風、凜、恋の四人誰が相手なのかと二人が問い詰めると、返って来たのは意外な名前だった。

「今夜は月と、その……詠なんだ」
『なあっ！？』

「か、一刀さん、詠さんまで加わったんですか！？」
「さっすがアニキ。よっ、都の種馬」

まさかの名前に雪蓮と秋蘭、斗詩が驚き、唯一人猪々子だけが囁き立てる。

「な、何故、詠が……」
「それがさ、さつき月のところに判が必要な書簡を届けたら」

執務室で詠と一緒に仕事をしている月の下を訪ね、判を押ししてもらう書簡を届けた。

他にも仕事があるので、雑談もせず戻ろうとすると月から待つてほしいと声が掛かった。

何か急な用事でもできたのかと思ったが、予想は斜め上にかっ飛ん

だ。

今夜は自分と詠を閨に呼んでほしいと。

「ちょっと待ちなさいよ。月は分かるけど、何で詠まで」

「実はさ、詠も入っているんだよね。多妻の中に」

「なんだとっ！」

一夫多妻に許可の印を押すにあたり、自分の気持ちに気づいた詠。ところが本人が天性のツン子なために、どうしても素直になれず進展がなかった。

先日 of 現代訪問でも進展は無く、話を稟から聞いた月が助け舟を出すことにしたのだ。

自分と一緒に素直になろうと。

二人きりにして素直になれるチャンスを作ったりせず、いきなり閨に呼ぶあたりに彼女の強かさを感じる。

「という訳なんだ、今回は諦めて欲しい」

さすがの雪蓮も、昔ならともかく今の月に口答えするつもりは無い。下手に逆鱗に触れてしまったら、いつかの麗羽の二の舞になりかねない。

「むう……残念。せつかく子育ての本を買って来たのに」

頬を膨らませて、胸の谷間に手を突っ込んで一冊の本を取り出す。世の男がこれを見たら、間違いなくこう叫ぶだろう。

その本になりたいと。

「気が早いよ！ ていうか、どこから出してんだよ！！」

「胸の谷間」

恥ずかしげも無く答える雪蓮に、逆に一刀の方が恥ずかしくなってしまう。

さすがはフリーダムキング、雪蓮だ。

「……秋蘭はそういうの、まだ買ってないよね」

「当たり前だ。子育てを気にするのもいいが、その前にやるべき事がある」

「やるべきこと？」

首を傾げる一同の前で、こちらは背中から厚めの本を取り出した。

「ちよつ、今のどうやったの？　というか、どうやって収納してたんだ！」

「なに、ちよつとしたコツがあるのさ」

小さく微笑む秋蘭が取り出したのは、名付けに関する本。

確かに子育てよりも先に、名前を付けるのはおかしくないが、それはそれで気が早い。

妊娠どころか、まだそういった行為もしていないのだから。

「お二人とも、気が早過ぎですよ。一刀さんが呆れていますよ」

第三者ゆえの視点と冷静さで斗詩が口を挟む。

やはりこういう時に役に立つのは、常識を弁えた善人だ。

「そんなこと言っただけ」

「うむ、仕方のない事だと思ってくれ」

「あつはつはつ、恋する乙女はなんとやらってか！」

空気を読めない猪々子の一言で、なんとなく気まずい空気が漂う。そんな所へ、タイミング良く侍女が現れた。

「失礼致します。蜀より鳳統様にご到着なされましたので、一刻後に会議を行なうとの事です」

「蜀の派遣員は雛里か。了解したって、詠に伝えておいてくれる？」
「承知しました」

礼儀正しく頭を下げた侍女が下がると、場の空気が緩む。

「ともかく、雪蓮と秋蘭も会議の準備をしたら？ 特に雪蓮は」

「分かっているわよ。そうそう一刀、私は明日の夜を予約するから」

今日は先を越されたからと、明日の予約をして身を翻して部屋を去る雪蓮。

それに続いて秋蘭も。

「では、私は明後日だな。楽しみにしているぞ」

含み笑いともとれる笑みを見せ、会議の準備のために出て行く。二人の背中を見送った一刀は、がっくりと卓に体を預ける。

ホンの十分程度のやり取りだったのに、何故仕事よりも気疲れするのかと考えながら。

「俺、体持つかな？」

「しっかりしろよアニキ。そんなんじゃ、今夜の閨も乗り切れないぜ？」

「ぶ、文ちゃん！」

こういう時、能天気な猪々子みたいな性格が羨ましいと思った一刀

だった。

この一刻後、予定通り他国の代表者との会議が行なわれた。先日現代に行った月、詠、風、稟により正式な学校設立の中止、それに代わる専門学校の普及。

さらにそのために必要な、資金面について話し合う事になった。

「学校の件は了解しました。私塾と違って、まだこの世界には早すぎるようですね」

蜀から派遣された雛里に賛同するように、雪蓮と秋蘭も頷く。

「専門学校なら、引退した職人さんがいればどうにかなるものね」
「だがそうになると、財政面での強化がより必要になるな」

人を雇うのにも、施設を作るのにも資金は欠かせない。

先人の知恵と経験を若者に伝えるのは、勿論悪いことでは無い。しかし、そのためには相応の資金が必要なのも、また事実である。

「魏は問題無いんじゃないの？ 数え役満姉妹の公演で、だいぶ儲かっていそうじゃない」

「確かに客はかなり入っているが、舞台設備の費用を考えると、それほど利益は無いんだ。何かいい手段はないだろうか」

「なら、グッズ販売はどうか？」

「ぐっず？」

聞き慣れない言葉に、一刀以外の全員が首を傾げる。

説明のためにと、モチカラで参考品をいくつか作って並べてみる。

「こうやって、三姉妹の顔とかを書いた商品売るんだ。直筆のサイン……署名なんかもいいよ」

卓の上に並べられた、顔絵やサイン入りの団扇や法被、手拭いなどの参考品。

中には時代にそぐわぬストラップやフィギュア、何故か掛け軸風の絵まである。

「こんな物が売れるんでしゅか？ あわわ、嚙んじやった」

「少なくとも、俺の世界では定番の品だよ」

ストラップはともかく、他の物は作ることができれば売れそうだ。

その点、魏には希代の技術者である真桜がいる。

団扇や手拭いの類は職人に頼み、フィギュアは真桜に教えれば作れそうだ。

「ふむ。これを参考品として、魏に送ってもいいだろうか？」

モチカラで作られた天和フィギュアを手に、真剣な表情の秋蘭が尋ねる。

勿論送っても構わないが、あくまでモチカラで作った物なので、扱いは注意するように伝えておく。

「ねえねえ、他には無いの？ ゲッズって」

「そうだなあ、抱き枕つてのも有りかな？」

そっち系統に強い友人〇から聞いた、最近よくある商品。

元々は何かを抱いて寝るといって、快眠ゲッズの一つだった。

それが今では、あらゆるキャラクターの絵が描かれたカバーが売られている。

巷では結構な評判だというのが、関西弁な友人〇からの情報だ。

「抱き枕？ 枕ってことは、頭を乗せるものなの？」

「違うよ。えつとね……」

言うより見せた方が早いと、抱き枕本体を作る。

これを抱いて寝るんだと説明すると、実際に雪蓮が抱いてみる。

「へえ、確かにいい抱き心地ね。これならぐっすり眠れそう」

「ですけど、これがどうしてグッズになるんですか？」

「理由はコレだ！」

自信満々に広げられた力バー。

そこに描かれているのは、寝巻き姿で横になっている月。

どこか甘美な姿の月の絵に、一同はおおっと声を上げる。

当の月は恥ずかしがり、詠はなんてももの見せるんだと喰らいつつこうとする。

そんな詠の目に、凄まじい絵が飛び込んできた。

「ちなみに、反対側はちょっぴりエロ仕様」

裏返して見せた、寝巻きが着崩れて頬を染める月の絵。

これを直に見てしまった詠は、不意打ちを浴びたようにダメージを受けた。

『ぶはっ！』

まるで稟のように鼻血を噴き、バタリと床に倒れてしまった。

鼻血の本家本元である稟も、絵を視界に捉えた僅かゼロコンマ数秒で何を想像したのか。

ほとんど詠と同時に、鼻血でアーチを描いて倒れた。

二人の処置には一番慣れている風が当たる。

「へううっ！ 何を作っているんですかあ！！」

慌てて月が絵を隠そうと、両手を広げて絵の前に立つ。
しかし、既にバッチリ見られていた。

「あわわ、しゅごいでしゅ」

「へえ、なんだか面白そうじゃない」

「北郷……。お前、なんとこの凶悪な物を……」

他国の使者達も、それと同じ物でいくつかのバリエーションを想像する。

そして確信した、これは売れると。

「北郷、是非それを作らせてくれ。後、参考品と姉者達の土産用に華琳様でそれを作ってくれ」

「それなら私も欲しい！ 冥琳で作ってよ。後、冥琳へのお土産用に私のも！！」

『それと一刀のも』

最初は土産用と言っているが、最後にはやはり欲望が勝った。

作ってくれと言われても、男の抱き枕カバーなど聞いた事が無い。
どうにか断ろうとするが。

「へう、私も欲しいです」

「風にもください。お呼ばれされなかった時の疼きを、それで慰めたいのですよお」

あるうことが自陣からも要請が出てしまった。

さらに復活した稟も鼻を押さえながら、自分もと手を挙げている。

「俺……何かやつちゃった？」

その後、抱き枕は四国共同で作られ、三姉妹カバーを魏が作ることで同意した。

結果、数え役満姉妹の抱き枕カバーはファンの間に浸透、一種のステータスにまでなる。

さらに、一刀が作ってあげた華琳抱き枕カバーは魏の将の間に。

そして一刀抱き枕カバーは、未来の妻達の間で流行った。

なお、カバー無しの抱き枕そのものは、大陸の各地で話題を呼んだ。不眠症が改善されたとの話もあり、飛ぶように売れた。

四国の経済は上昇気流、国庫は見事なまでに潤うことになる事を、まだ誰も知らない。

「さて、魏はこれでいいとして、一番の問題は蜀かな？」

実際問題、一番経済面を考えるべきなのは蜀。

前の戦いの傷跡からの復興、その後の建て直しのために大分金を消費している。

ただでさえ経済面が弱いだけに、かなりの痛手だった。

「経済面を支える特徴から考えても、蜀が一番不安定なのよねえ」

鼻に一刀持参のポケットティッシュを詰めた詠が、話を切り出す。

蜀の主な収入源は、岩塩と農作物。

だが、岩塩は呉が海水から作った塩を売り出して以降、収入が減った。

おまけに農作物に至っては、天候次第で不安定極まりない。

どんなに豊作になっても、収穫前に嵐がくれば全滅。

農薬なんて物もないため、害虫被害が出る場合だってある。

それに対し、他国には安定した収入源がある。

魏は華琳の手腕に加えて、今度はグッズ販売が行われれば、安定した収入が見込める。

呉は海水からの塩の生産に加えて、海に面し、川が多い利点を活かした漁業がある。

都も一刀の知識のお陰で商業が発展し、涼州の馬を利用した輸送方面でも利益を上げている。

「しょ、しよれは分かっているんですが……」

何も良い策が無いのだと、帽子を押さえながら俯く雛里。

さすがにこの世界では、風よけのビニールハウスを建てる訳にもいかない。

そもそも、ビニールが無いのだから。

しかし、いつまでも岩塩による収入にだけ頼る訳にはいかない。

「それについては、今後お兄さんの世界から使えそうな知識を提供しますよ」

「あ、ありがとうございました」

「断っておくが、情報料は高いぜ。それと、ツケは利かないぜ」

頭の上の宝慧の発言に、雛里があわわあと慌てる。

緊張気味だった空気が緩み、微かに笑い声が漏れる。

「じゃあ纏めると、魏はグッズ販売による経済効果を適用ね」

「ああ。この参考品と書を送って、華琳様に許可を頂ければな」

「蜀の方には次回までに、有効そうな案を考えておくわ」

「うう……すみません」

申し訳なさそうな様子を雛里の可愛らしさに、雪蓮の手がワキワキ

と動く。

この会議の終了後、ものの数秒で雛里は雪蓮に抱きかかえられた。

「あわわあああ……！」

他国の来訪者【外史】（後書き）

他国からやってきた来訪者。

彼女達以外にも、誰かがやって来るのだろうか？

一刀の種馬評判記【外史】

前回の会議で改めて認識した、蜀の脆弱性。

アンコクの計略で多くの人数を失い、それに伴っていくつかの店や貴族、豪族が潰れた。

戦が終わった今、逆にそれをチャンスと踏んで蜀に進出しようとしている者もいる。

市場が低迷している今なら、自分達にも仕事があるのではと考えて結果、閉店した店には職にあぶれた料理人達が集まり、金を出し合っ
て新装開店。

金が無い者は屋台を出して、資金調達と事業の足がかりにしようとしている。

また、賊に身を落としていた元農民達が農家に戻るため、土地を求めて蜀にやって来た。

「こうした移民達のお陰で人口は回復しつつあり、景気も僅かですが上向きになっています」

蜀の人口や景気について、現状を報告する離里。

当然、今の話に出てきた移民は他の三国にいた民だ。

各国はこれを極力引き止めようとせず、民の意向を尊重した。

国の景気が良いとはいえ、全ての業者や経営者がそういう訳ではない。

そういった人達にこれはチャンスだと説明し、他国に出て勝負する機会を与えた。

勿論、そういった人々には数日前から顧客への通告するよう厳守させ、後に問題が起きないように伝えた。

「呉の方では、主に海水塩に関わっていた人が蜀に行ったわ。同じ

塩に関わる者として、岩塩事業を手助けしたいんですって」

今日は遂に一刀と閨を共にできるとあってか、やけに上機嫌な雪蓮。嬉々としながら、呉からの移民について報告する。

「都からは主に商業に関わる方が、新しい顧客開拓のために蜀へ進出しています。後、雇っている人に暖簾分けという形で、蜀に送り出す機会を与える店も多いですね」

前夜に詠と共に一刀と体を重ねた月の肌は、これでもかばかりに艶々している。

なお、詠本人は腰痛のために本日は休み。

会議には代理として風が参加し、風の仕事が詠に回されている。

原因となった一刀は、帰宅後に時間が無かったので、学生服のまま会議に参加中である。

「魏からは、主に料理人が蜀に向かっていているな。季衣が幹旋していた無職の料理人、華琳様がお認めになった店の弟子で、独立を認められた者と様々だ」

翌日の夜には一刀と過ごせると考えながらも、あくまで冷静に報告をする秋蘭。

ここまでの三国の報告通り、蜀への人の流れはある。

勝負を賭けて来ただけあって街は活気に満ち、農民は懸命に働いている。

だが、ただでさえ弱っている蜀には、もっと大きな活気が欲しい。

「という訳で、何かいい案はありませんかあ？」

マイペースな口調の風が質問すると、まず手を挙げたのは雪蓮。

「盛り上げるなら、やっぱりお祭りでしょ」

提案するのは、活気を出すために祭りを行なえないかという事。同時に祭りを通して蜀を知ってもらい、各国の商人に来てもらえればと考えている。

品物の売りつけもそうだが、蜀が通じている南蛮の製品や、蜀ならではの商品の買い付けなど。

さすがは派手好きで元王の雪蓮らしい意見だが、一つ重要な欠点がある。

「あわわ、今の私達にはそれだけの事をするお金が……ううっ……」
「あ、その……ごめんね」

雪蓮が思わず謝ってしまうほど、雛里の表情は落ち込んでいた。祭りをしようという案は、既に蜀内部でも出たのだが、実行するだけの資金が無い。

国興しをするとなると、かなりの資金が必要となる。
しかし、現在の蜀にはそこまでの余裕が無い。
かといって、借金をしてまで祭りをする訳にもいかない。

「だ、だけど、南蛮との繋がりを強調するのは有りじゃないかな？」
空気を換えようと、良さそうな点を強調する。

「えっ？ あっ、はい！ それは確かに有効だと思います」

どうにか持ち直した雛里が反応を示した。
落ち込ませてしまった雪蓮も、ほっとして話に参加する。

「でしょでしょ！」

「知らない物に対して、保守的な意見はあると思いますが、興味が無い訳ではありませんからねえ。よっと」

その典型が天の国だと言いながら、新しい飴を取り出して舐め始める風。

これで重かった空気は、完全に消え去った。

マイペースに空気を読める、これが風クオリティ。

「良さそうな品物があつたら、私達は積極的に商業契約しますよ」

早速話を切り出した月。

さすがは商業で成長した都を治めるだけあつて、商いの機は逃そうとしない。

「あわわあ、本当ですか！ でしたら、一度蜀に来ていただけますか？」

「私は構いませんよ。でも……」

賛成しながらも、チラッと一刀に視線を向ける。

出入り口の扉が都にしかない以上、都以外には直接行けない。

普段は学校もあるので、長旅の同行もできない。

さらに現代行きの権利を得た面々の案内もある。

つまり、一刀はよほどの事が無い限り、都以外には行くことができないという事だ。

「月、気持ちは分かるけど、我が儘は駄目だよ」

視線で何を考えているかを読み取って、説得する一刀。

勿論、昔よりずっと成長した月が、そんな事を分らないはずが無

い。

彼女が気にしているのは、もっと別の事だった。

「分かっています。けど……」

「けど？」

「私の留守の間に、一刀さんが新しい女性を落とさないか不安で不安で」

この発言に一刀は椅子から転げ落ちた。

「ちよつ、待つ！ 月は俺をなんだと思っているんだ!!」

「無意識に女性を魅了する悪い癖を持った、私達の未来の夫です」

自分も魅了された一人ですけどね、と付け加えて小さく笑う。

一方の一刀は、あながち間違っていないと視線を泳がす。

別段意識しているわけではないのに、いつの間にか周囲に女性が大勢。

これではさすがに何も言い返せない。

「雪蓮さんや秋蘭さんのように、知っている方なら許してあげますけど」

「あら、そうなの？ だったら蓮華でも呼んであげる、天の血をもつと呉に頂戴」

「ならば魏からは……。うん、風などどうだ？ 少々真面目過ぎるが、素直ない子だぞ」

「やめて！ なんでそういう方向に話が進むの!？」

ひとりで進む話にライフをゼロにされた一刀には、現状をどうすることも出来ない。

半分泣き寝入り当然に頭を垂れ、周囲から笑いを受けた。

「さて、冗談はここまでにして」

「冗談だったの！？ 私、本気で蓮華呼んで、一刀とまぐわってもらおうと思ったのに！」

「…………… 本当に呼んだら、麗羽さんと同じ目に」

ボソツと呟いた月の一言だが、これが全員の耳に届いた。

脳裏に蘇るのは、障害物競走の後の話し合いで、我が儘を言う麗羽におしおきをする月の姿。

各国のチビツ子達が泣いて逃げ出す内容は、いかに雪蓮とて恐怖を感じる。

「い、いやぁねえ、これも冗談よ」

「ならいいんですけど」

慌てて訂正した途端、黒みを帯びていた表情が明るくなった。

切り替えが早いのはいいことだが、これだけ早いと逆に怖くなる。

「すぴすぴ……………」

「寝るな！」

「おおう。あまりの恐怖を思い出したせいか、つい現実逃避を」

風とて顔と態度には出していないが、随分と恐怖を感じていたようだ。

その証拠に、頭の上の宝慧が震えながら右往左往している。

「月…………… 恐ろしい子になったな」

辛うじて平静を保っていた秋蘭は、そう言わなくてはいけない気がした。

結局会議はここで終わり、次回で正式な蜀行きについて話すことになった。

雪蓮と秋蘭も、それぞれ蓮華と華琳に連絡を取って、蜀行きの打診をするそうだ。

これらが決定すれば、蜀で第二回目の四国会議が行われる事になるだろう。

「前は俺達のところで、四国協力体勢と同盟について。次は経済バランスについてか」

「まだまだ、やらなきゃいけない事がたくさんありますね」

正式に決定するまでは時間が掛かるが、やることは山ほどある。少なくとも月は蜀に出かけるので、その間の仕事の引継ぎや責任者の決定。

蜀に出向いている霞にも、連絡を取らなければならない。

「へうう、忙しすぎだよお」

「そうは言っても、これが俺達の望んだ世界なんだろう？　なら頑張らなくちゃ」

「そう言ってお兄さんは、後継ぎを産ますために未来の妻を孕ませるのですた」

「ちよっおっ、風ううううっ！」

見えて飽きない一刀と風のやり取り。

残念ながら、今のところおめでたの話は聞かないが、最初は自分だと誰もが願っている。

「ううう……どうせ俺は種馬ですよお」

「おいおい兄ちゃん、自分で言っていて悲しくねえかよ」

廊下の隅っこで小さくなっていじける一刀に、腕を組んだ宝慧が突っ込む。

ぐさりと来た一言に、膝と両手を床に付いて落ち込む。

そんな一刀を慰めながら、月が風に笑っていない笑顔を向ける。

「風ちゃん、欲求不満だからって、そういうのは良くないよ?」

「今のは宝慧ですよ。まあ、欲求不満は否定しませんが」

「仕方ないだろ。学校があるから、毎晩毎晩こっちには居られないんだ」

つい先日、しばらく都を離れるからと、真っ昼間から星と霞を二人同時に相手にした。

さらに夜には恋との約束があった。

それらをこなして將軍三人を完封したものの、翌日の学校への足取りは疲労感で重かった。

さすがにあの三人相手はきつかったようだ。

ちなみに、妙な一刀の様子をしつこく聞いてきた友人の〇氏は、疲労で沸点の下がった一刀に仕返しをされた。

筋肉達磨二名に連絡を取り、上手く言い包めて〇氏を追いかけさせたのだ。

その日、眼鏡を掛けた関西弁の少年が、二人の変態に追いかけられるという事件が起きた。

なお、〇氏の貞操は辛うじて守られたそう。

「むうう……」

不満が積もり頬を膨らませる風。

可愛らしい外見とは引き換えに、彼女の心の中はざわめいている。

「そう怒るなって。もうすぐ夏休みだから」

「夏休み、ですか？」

「あつ、まだ説明してなかったつけ？ 夏休みっていうのは」

少し立ち直って夏休みの説明をすると、二人の目はこれでもかと輝きだした。

「夏休み素晴らしいです！ これで四十日は一刀さんと一緒にいられます」

「そうと分かれば、手早く仕事を終わらせて、お兄さんとの日々を謳歌する暇を作らなくては」

そう言い残して、二人は執務室に走って行った。
二人と入れ替わるように、向かい側から恋と華雄が現れて二人の背中を見送り、首を傾げた。

「師匠、月様と風はどうかしたのか？」

「ちよつと色々あつてね。二人は訓練の帰り？」

「……ん」

小さく頷いた恋は一刀に歩み寄り、腕にしがみついて上目遣いをする。

「……………お腹空いた」

最近随分と誘い方が上手くなった恋の誘惑に、勝てる者はいない。
もともと、向けられる男は一刀だけだが。

「ぐはっ！ さ、さすがは恋。ツボを弁えている」
「…………？」

本人は無自覚のようだが、かなりダメージを受けた。傍らで見ている華雄も、思わず苦笑いを浮かべる。

この後、二人を連れて一刀の部屋でお茶をすることになった。それがいつの間にか、押しつけてきた雪蓮によって酒盛りに変わった。

「んぐ、んぐ、ぷはあ！ どうだー！」

「やるわね、華雄。じゃあ九杯目！」

「望むところだ！」

飲み比べをする雪蓮と華雄。

圧倒的に雪蓮優勢で進んでいるが、華雄も頑張っている。

その様子を、黙々とお菓子を食べる恋の隣で、一刀は眺めていた。

「恋、美味しいか」

「ん」

現代から持ってきたカステラをほお張り、満面の笑みを浮かべる。多めに持ってきたのが幸いして、まだ皿の上にはいくつも残っている。

「こらあ、一刀も飲みなさいよお」

飲んで気分が良くなった雪蓮が、杯を押し付けてくる。

拒否しようとしても押し切られ、飲まされ、気づけば夜になっていた。

酔いつぶれた華雄は服を着たまま床で大股開きで眠り、雪蓮と恋は一緒に寢所の上で裸で両隣に寝ていた。

「……やっちまったなあ色々と」

どうやら華雄とは事に至っていないようが、二人を相手にハッスルしてしまった。

しかも四国でも五本の指に入る豪傑相手に。

「さてと、取り敢えず後片付けでも……？」

体を起こそうとするが、何か妙な重さと柔らかさを体の上に感じる。嫌な予感を抱きつつ、掛けている毛布をどかしてみる。

するとやっぱりというか何と言うか。
生まれた姿の秋蘭が寝ていた。

「……本気で記憶に無い」

がつくりと落ち込みつつ、寝起きの頭で今回の事を予想してみた。
雪蓮と華雄の飲み比べに、強制的に加えられる。

華雄、酔いつぶれて就寝。

酔った勢いで雪蓮と、さらにその場にいた恋とまで。

途中でやってきた秋蘭参戦。

現在。

「まあ、雪蓮とは約束通りだし、秋蘭とも予定が早まったと思えば」

「ということは、明日は風がおねだりできるのですねえ」

声に驚いて振り向けば、いつものように飴を咥えている風がいた。
その後ろには、鼻血を流して倒れている稟。

そして稟を介抱しながら、笑みを向けてくる月。

「一刀さん、弁明は？」

「ありません」

「じゃあ罰として、明日は私達三人の相手をお願いしますね。そうそう、詠ちゃんとなねちゃんには黙っておきますから」

そう言い残すと、フラフラと立ち上がった稟を連れて、三人は引き上げていった。

残ったのは、苦笑いを浮かべる一刀と静かに眠る四人の女性達。

「俺、今週で死ぬかも」

後日、一刀は意地と気合と根性で乗り越えたものの、干からびる寸前で華侘に助けられた。

この二日後、月は詠と華雄と共に、蜀へと出発した。

一刀の種馬評判記【外史】（後書き）

重要な会議のため、蜀に旅立った月。

次回はお留守番メンバーによる、拠点フェイズ的な話です。

お留守番拠点【外史】

各国の王が蜀に集まって経済会議をするというので、派遣されていた各国の代表は一時帰国した。

雪蓮と秋蘭も、肌を艶々させながら帰郷。

入れ替わるように星、霞、七乃に美羽が帰って来た。

滞在中の報告を書簡に纏めると、美羽と七乃は自室で休息を。

星と霞は一刀の部屋へと押しかけた。

「一刀、だたいまあ！」

「帰って来ましたぞ、主殿」

帰って来た二人が扉を開けると、畳張りの和室で卓袱台の上にカセツトコンロと鉄板を用意している一刀がいた。

「あつ、おかえり二人共」

「主殿？ 何をしているのですか？」

「いやさ、そろそろ星達が帰って来るだろうと思って、軽い宴会の準備をね」

宴会と聞いて、星と霞が反応しないはずがない。

互いに向かった国で購入した酒を取り出し、杯を取りに走る。

厨房から杯を持ってくると、いつの間にか恋とねね、風と凜が部屋に来ていた。

それぞれ、何かしら食材や食べ物を持って。

「なんやなんや、ほとんど全員集合かい」

「後から斗詩も加わるよ」

部屋で旅の疲れを癒している美羽と七乃はともかくとして。

こういう場には積極的に参加しそうな麗羽と猪々子が、何故か来ない。

それを尋ねると、二人共溜まっていた仕事を二日徹夜して終わらせ、寝ているそうだ。

いくら宴会とはいえ、起こすのは気が引けるらしい。

「美羽と七乃さんは？」

「部屋で寝とるよ。長旅と魏での仕事で疲れたんやて」

コンロについて説明をしながら、着々と準備を進める。

鉄板もいい感じに温まった頃、食材を片手に斗詩がやってきた。

「それじゃあ、お好み焼きパーティー。始めるぞ！」

だがこれが、留守番組の混沌とした宴の始まりだと、知る者は一人もいなかった。

パターン星&霞　メンマとお好み焼きと酒飲みと

率直に言えば、お好み焼きには皆が満足してくれている。

基本、名前通りお好みに作れるので、各々が持ち寄った食材が入っている。

恋は肉たっぷりのを黙々と食べ、妄想をして鼻血を噴いたせいで真っ赤になったのは、責任を取って稟が。

星と霞が持ってきた酒もあり、宴は楽しく進んでいた。

「いやあ、旨いなあこれ。ウチは気に入ったで」

さすがは関西弁だけあって、霞には特に気に入ってもらえたようだ。酒を片手に食べていると、妙な食感を覚えた。

「なんやコレ。なあ一刀、これに入れたんは何や？」

「それ？ 確か肉とキャベツと卵のシンプルな奴だけど？」

「ほな、なんやねん。この食感は」

首を傾げる霞に、一刀が一切れとって口に入れる。

すると確かに、入れた物とは違う食感ある。

不思議に思っていると星が。

「ああそれか。焼く直前で私がメンマを入れた。こうして食するの
も、なかなかいいものだな」

それを聞いた一刀と霞はずっこけた。
いつの間に混入したのかというのも気になるが、やはり星はメンマ
だった。

「アホか！ いくら何入れてもええからって、んなモン入れんなや
！！」

「これはおかしな事を。何を入れても構わないからこそ、メンマを
入れたのではないか」

「メンマを入れる神経が分からん言うとなんや。どうせなら、肉入
れんかい、肉！」

満足そうにメンマ入りお好み焼きを食べる星に、霞が突っかかる。
以前にラーメンには叉焼かメンマかで揉めたが、今回も大して変わ
らない。

食べ物がラーメンから、お好み焼きに変わったくらいだ。

「こうなったら呑み比べで白黒付けようや」
「ふっ、望むところだ。手加減はせんぞ」

前回は喧嘩で周囲を巻き込みそうになったが、今回はサシでの飲み比べ。

おそらく、被害はそれほどでもないだろう。
酔いつぶれた二人が、暴れださなければの話だが。
ともかく、今の内に食べておこうと箸を動かす。
そこへ忍び寄る、二つの黒い影があった。

パターン恋&ねね 飛將軍のお好み焼き奮闘記

「……一刀、上手く返せない」

コテを片手に一刀の服を引っ張る恋は、ひっくり返すのに失敗したのか、頭にお好み焼きを乗せている。

ねねはそれを取ろうと飛び跳ねているが、キックの時とは違って届かない。

どうやらあの跳躍力は、キックを繰り出す時限定らしい。

「ああ、はいはい。今やるから。だから早く頭の上の残骸を下ろして、着替えてきなさい」

促されるままねねと退場する恋。

着替えて戻ってくると、目の前で返して見せる。

「こうやって下に差し込んで……ほっと！」

それを見て頷いた恋は、次に焼いていたお好み焼きを見事にひっく

り返した。

「さすが恋殿なのです。一回見ただけでできるとは！」

自分ができた訳でもないのに、偉そうに胸を張るねね。残念ながら、どんなに胸を張ろうと自慢にはならない。

「……ねねもやる」

「了解なのです！ てやあ！！」

気合い一閃でコテを振り抜くと、お好み焼きが宙を舞って裏返る。このまま鉄板に着地したまでは良かったが、落ちた衝撃で見ても無残に崩れていた。そもそも、振り抜いたせいで上半分くらいしかひっくり返っていない。

「……………ぐすっ」

「泣くな恋、量が減った訳じゃないからな。二つに分かれただけだから！」

「すすす、すみませんなのです、恋殿お！」

平謝りするねねに恨みがましい視線が刺さる。食べ物の恨みとは、恐ろしいものである。

「こうなったら名誉挽回、汚名返上！ 今度こそ成功させるのです。とやあ！！」

恋の機嫌を取り戻すために再度挑戦するが、宙を舞うお好み焼きは半回転どころか一回転する。

まだ焼けていない方が上になって着地したので、ねねに焼けていな

い生地が飛ぶ。

同時に油も跳ねたので、熱さに悲鳴を上げてのた打ち回る。
一方で恋はまた駄目だったのかと、再び落ち込んでいた。

「熱っ、熱っ、熱いのです！」

「だぁもぉ、ねねはその技禁止！ それと恋、ちゃんとひっくり返せば食べられるから、なっ！！」

落ち込む恋を宥めるのに苦労する、一刀であった。

なお、ねねはちよつと火傷したものの、目に入らなかったため大事には至らなかった。

パターン風&稟 おつまみ珍道中

恋とねねの一騒動が終わった一刀が元の席に戻ると、左右に座っていた風と稟が何かを食べていた。

それは酒のつまみと思い、現代から持ってきたいくらかのつまみ。風は飴を宝慧に持たせて黙々とチーカマを食べ、稟はさきいかを干切って小さくして咀嚼する。

「気に入ってもらえたかな？」

「おお、お兄さんではないですか。風はこの「血異禍魔」が気に入りましたよ」

「……なんか変な当て字が入った気がするんだけど？」

「気のせいなのですよ」

そう言ってもう一つチーカマを取り出し、口に咥えて食べ進める。

「一刀殿、これはいいですね。噛めば噛むほど、味が染み出てきま

すよ」

次に話しかけてきたのは、さきいかを千切って食べる稟。よっぽど気に入ったのか、もう一袋の半分以上を一人で食べている。これでカップ酒さえあれば、安上がりな酒盛りにしか見えない。

「その手の物が気に入るなら、これはどう？」

取り出して見せたのは、牛肉を香辛料で味付けして薫製にした物、所謂ビーフジャーキー。

こちらも噛めば噛むほど、味が染み出てくる。

「どれどれ？ うん、いけますね……って辛っ！」

一口分を齧って噛みしめると、なんとも言えない味が口に広がる。だが次の瞬間、強めの香辛料が効いてきた。

慌てて手元にあった酒を呷り、はあはあと息を切らす。

「ず、随分と刺激が強いんですね。油断しました」

「これくらい強くないちゃ、酒のつまみにならないからね」

じつくりと噛みしめる一刀の隣で、今度はチーズ鱈に手を付ける風。どうやら風は、チーズ味が気に入ったようだ。

「だったらこっちはどうだ？」

続いて稟に差し出すのは、つまみの定番するめいか。

しかもちゃんと炙ってある。

千切って手渡すと、最初はおそろおそろだったが、一口食べると気に入ったのか黙々と噛んでいる。

「どう？」

「気に入りました。まだありますか？」

「はいこれ。千切って食べるといいよ」

束の物を買って来たので、それを丸ごと手渡す。

受け取った稟は小さく千切って噛みしめながら、手元の酒をチビチビと飲む。

その姿は、どこかの雰囲気の良い飲み屋で飲んでいるようだ。

目の前にお好み焼きの鉄板が無ければ。

苦笑いを零していると、横から風の弱った声が聞こえた。

「お兄さん……。この匂い、風には無理です」

パタリと一刀の膝の上に倒れた風の手には、ブルーチーズが握られていた。

「風ううつ！　しつかりしろお！　くそつ、やっぱりこいつの匂いは無理だったか。父さんも、何て物を渡してくれたんだ」

強い匂いの物を好む、一刀の父の差し入れによる被害だった。

同様に、差し入れの腐乳を食べようとしたねねが、恋の膝の上で倒れていた。

パターン斗詩　酔いつぶれた苦労人

風を稟に預け、出来たてのお好み焼きを食べる一刀。

その背後に酒壺を持った人物が近づいてき、後ろから抱きついて来た。

戦闘中でなかったために警戒していなかった一刀は、驚きの声を上げる。

「一刀さあああん！」

「どわあっ！ 誰だ、って斗詩か……酒臭っ！！」

後ろから抱きついて来たのは、意外にも斗詩だった。

普段の大人しさはどこへやら、酒壺を片手にケラケラと笑っている。

「あははあ、楽しいお酒ですねえ」

「楽しいのはいいけど、飲み過ぎだよ！ 誰だ、こんなに飲ませたのは……！」

周囲を見渡して視線を逸らしたのは、飲み比べをしている星と霞。他はちゃんと一刀の方を向いているが、この二人は視線を反対側に向けている。

おそらくは何らかの理由で巻き込まれ、飲まされたのだろう。

「飲まなきゃやってられませんよお。文ちゃんの事務仕事までやって、最近は麗羽様の愚痴の相手までしてるんですからあ」

文句を言っ て酒を飲むと、今度は泣き出した。

「ふえええん。一刀さあん、麗羽様にやったあのお仕置き、文ちゃんにもしてくださいよお」

日頃のストレスからか、友人にお仕置きをしてくれと言い出す。さらに酔った勢いとはいえ、とんでもない事まで。

「お礼に閨の相手ぐらいはしますからあ」

「ぶっ！」

これに反応したのは、一刀よりも星達、別名嫁連合の五名。星と霞は飲み比べそっちのけ、恋は箸を咥えて、稟と復活した風も交えて斗詩を睨む。

曰く、酔っているとはいえ、自分達の夫に手を出すのかと。そんな視線にも気づかず、斗詩はしっかりと抱きついてくるのでたまらない。

視線は斗詩だけでなく、一刀にまで向く。

「一刀殿……」

「お兄さん？」

「どないするんや、一刀」

「主殿の判断はいかに？」

「一刀……」

腐乳の匂いで倒れたねねを除く五人の視線が、一斉に突き刺さる。酔って愚痴を洩らす斗詩に迫られる一刀は、覚悟を決めた。

ちょうどお好み焼きも全て食べ切ったので火を消し、隅の方に片付けて両腕を広げる。

「バッチこおいつ！」

掛け声と共に飛び掛る五人。

その後の事は、現場にいた七人だけが知る。

ちなみにねねは、事に至る前に恋の手で部屋に送り返されていた。翌朝、酔いの覚めた斗詩はもの凄い勢いで土下座して謝罪した。

「すみません、すみません！ 酔った勢いとはいえ、皆さんの旦那様を」

「その心配はいらないですよお」

心配無用と言った風が見せるのは、嫁連合の名簿。

その一番下に、いつの間にか斗詩の名前と拇印が押されていた。字が震えている様子から、酔っているときに書いたのだろう。

「いいい、いつそんな物を!？」

「これに署名せねば主殿とできないと言ったら、笑顔で署名していましたぞ」

「勿論、拇印も本物やでえ」

次々と告げられる真実に、がっくりと膝を着く。

だが風と星が二つ三つ耳元で呟くと、惚けた表情で今後よろしく願いますと頭を下げた。

「はっはっはっ、さすがは一刀やな」

「一刀殿に落とせぬ女性は、いないという事ですかね」

霞と稟の呟きは、干からびる寸前で恋と眠っている一刀には届かなかった。

こうして嫁連合に新たな名前が刻まれた。

更に朝食後、話を知った猪々子も斗詩は自分のだからと署名をした。なんでも、二人で相手にしてもらうのだとか。

なお、この事は蜀に出かけている月にも伝わり、後日お仕置きと称して一晩中一刀と愛し合った。

呆れていた詠も巻き込んで。

お留守番拠点【外史】（後書き）

新しい名を連ねた嫁連合。

次回は現代にあの人達が行きます。

恋姫輪廻【現代】

平穏な昼下がり、実家の庭に響くのは竹刀のぶつかり合う音。そして空を切る風切り音と、今回現代に来る権利を得ている霞、星の悲鳴。

「ちょ、ちょっ、待つちいや!」

「主殿、少しは手加減してください! 剣には慣れていないのですぞ!」

いつもの如く、母親の着せ替え人形にされること三十分後。

竹刀に興味を持った二人が、これで手合わせを試みようと言いだした。

了承して庭で稽古を始めたのだが、さすがに剣が専門の一刀には二人がかりでも敵わなかった。

「手加減したら強くなれないぞ?」

「でしたらせめて、普段扱っている武器で戦わせてください」

「そやそや、一刀だけ専門武器なんてズルイで」

「……始めにこれでやろうって言い出したの、お前達だろう?」

鋭い指摘に二人揃って視線を泳がせ、なんの事やらと惚ける。

「こら一刀、お嫁さん怒らせたら駄目よ」

「怒っているのは寧ろ俺なんだけど?」

母親が用意してくれたお茶を啜り、数羽の雀が降りている庭を眺める。

志葉家ほどではないが、北郷家の庭もそれなりに広い。

稽古をする場でもあるので、池やらなんやらは無いが、木が数本植えてあるだけの簡素な庭。

たまに祖父が木の手入れをするのだが、それ見てみると、盆栽代わりに木の手入れをしているように見えてならない。

「それにして、今度のお嫁さんはお二人共武人なのね。うふふ、懐かしいわ。私も十七代目として、戦っていたのよねえ」

過去の思い出に浸る母親は放っておいて、今度は星と霞の二人で竹刀を取り向き合う。

慣れない剣での戦いだけに、最初はほとんどチャンバラごっこのような稽古。

しかしそれも、慣れるにつれて徐々にまともになってきた。

「へえ、さすがは戦乱を生き抜いた武将同士。ある程度は形になってきたな」

「そうねえ。素人にしては、まあまあつてところね」

北郷母子から厳しい評価を受けつつ、稽古を続けている星と霞。そこへチャイムが鳴り、母親が対応に向かう。

しばらくして戻って来た母親の顔は、どこか楽しそうだった。

「どうかしたの？」

「お客様よ。しかも、お父さんに一手御教授願いたいですって」

つまりは道場破りのようなもの。

こうした輩が来る理由は、老人会の温泉旅行に出かけた祖父にある。跡目を譲った後の祖父は地域、果ては全国の剣道大会に出場して優勝している。

出場理由は暇つぶしと、今の剣道がどれほどなのかを見るためだと

いう。

だがこうした結果に加え、家が代々続く剣術の家系と知られたため、たまに勝負を挑んでくる者が来る。

家系の秘密は知られていないが、挑んでくる者の中には全国に名を馳せる剣道家、剣術家もいた。

そうした相手を祖父は次から次に撃破したため、あっちこっちに名が広まった。

結果、時折こうした挑戦者が、北郷家に来るようになってしまった。

「爺ちゃんいないよね？ どうするの」

「適当に理由言って返すのもなんだし、一刀が相手してあげれば？」

「それもそうだね。分かった、じゃあ庭に通して」

竹刀を片手に立ち上がりながらそう告げると、母親はそそくさと玄関に戻る。

稽古をしていた星と霞が縁側に座り、挑戦者を待つ。

「どないな奴やるな」

「うむ、実に楽しみだ」

「あんまり期待しない方がいいよ？ 本当に強い人が来るのは、極稀だから」

その極稀な強者を相手に、祖父は苦戦をする時もあるが全戦全勝している。

留守を預かる身としては、なんとしても勝たなくてはと、頬を叩いて気合いを入れる。

ちょうどそこへ、庭に連れて来られた挑戦者が現れた。

「失礼します。お爺様がいらっしやらないという事で、現当主のお孫さんが相手になると聞きました」

家の陰から現れた人物に、一刀が、星が、霞が驚きの表情を浮かべた。

連れられて来たのは、一刀とそれほど年が離れていないであろう、大学生くらいの女性。

道着を着て竹刀袋を持っているのは問題無いが、驚いた理由は外見にあった。

凛としたツリ目気味の目つき、サイドテールに纏められた黒く長い髪。

それはそう、あの外史で助けられなかった関羽そっくりだった。

「えっと……………北郷家十八代目当主、北郷一刀です」

「これはご丁寧に。私は関愛紗せきあいしゃ、大学で剣道を嗜んでいます」

頭を下げながら告げる名前に、なお驚きは隠せない。

記憶が確かならば、愛紗というのは関羽の真名だったはず。

しかも読みが違うとはいえ、姓も同じ「関」。

仮に生まれ変わりだとしても、こうまで上手く一致するものだろうか。

「どうかなさいましたか？」

「あつ、いえ、別に」

「そうですか。そちらの方々は？」

ポカンと口を開ける星と霞に気付き、問い掛けてくる。
はっと意識が戻った二人は、慌てて名前を教えた。

「趙子……………趙星と申す」

「ウチは張霞や。どっちも一刀のよ……………武道仲間や」

すっかり趙子龍と言いつつも、どうにかこっちの世界で
の名前を名乗る。

やはり姓と真名の組み合わせを名乗るのは、まだ慣れていないよう
だ。

おまけに霞にいたっては、嫁と言いつもになっている。

「名前からして、中国方面の方々ですか？」

「ええまあ。彼女達が使うのは槍ですが、お互いに武を通じて知り
合いました」

「そうですか。扱う武器は違えど、武を通じたご友人ですか。いい
ですね、そういうの」

微笑んでみせる表情は、とても穏やかに見える。

もしもこの女性を蜀の誰かに見せれば、間違いなく関羽と間違える
かもしれない。

「ところで、手合わせでしたね。祖父が留守なので、俺がお相手す
るという事でよろしいですか？」

一刀の問い掛けに愛紗がこくりと頷く。

互いに竹刀を取って庭の中央に立ち、構えを取って対峙する。

審判役の母親が両者を確認し、合図を出そうとする。

「両者、よろしいでしょうか？」

「俺はいいけど、関さんはどう？俺のは剣道じゃなくて、実戦向
きの剣術だよ」

「元より承知の上。私の剣がどこまで通用するか、挑むだけです！」

「時間無制限、一本勝負。勝敗の付け方は通常の剣道と同じとしま
す。それでは、始め！」

開始の合図がかかるが、互いに相手の出方を見るつもりなのか、待ちの様子を見せる。

しばし睨み合って、最初に動いたのは愛紗。

掛け声と共に突進し、突きを中心に一刀を攻めたてる。

鋭い突きに襲われるが、外道衆と戦い、戦乱を生き抜いた一刀には一撃も届かない。

（実力的には蒲公英くらいかな？）

「くつ、当たらない！」

蒲公英レベルでも充分強いのだが、それはあくまで現代での話。戦乱の時代なら、まだまだ物足りない。

さすがに時代の違いがあるのか、ここまでは似なかったようだ。

「面っ！」

会心の一振りを繰り出すも、軽いバックステップで回避され、竹刀が地面を叩いたと同時に懷に踏み込まれる。

「胴っ！」

「胴あり一本！ 勝者、北郷一刀」

胴に軽く一撃を当てると、あっさり勝負は決まった。

やはり、本当の意味での実戦経験の差が出た勝負だった。

戦乱を戦い抜いた一刀と、道場や剣道大会でしか戦っていない愛紗。扱う剣の質と力量を差し引いても、経験の差は歴然としている。

「くつ、参りました」

潔く負けを認めて頭を下げる愛紗。

分かっていたとはいえ、勝った事に星と霞が声援を送る。

「ええぞ、一刀!」

「さすがですな。そうではなくては」

やんや、やんやと騒ぐ二人に手を振る一刀に、顔を上げた愛紗が詰め寄る。

「一つお尋ねしたい。どうすれば、それほどまでに強くなれるのですか?」

「どうすれば、って聞かれてもなあ」

とても代々外道衆と戦っている家柄だから、とは言えるはずがない。かといって、適当に言っただけ引いてもらえない雰囲気でもない。

ならば答えは一つ、真実に触れない範囲で本当の事を告げるまで。

「強くななきゃいけない、理由があつたからかな?」

「ほう? それはどのような?」

「それは……悪いけど秘密だ」

本当の事を言っても、普通の人からすれば頭の中を疑われかねない。それならまだ、秘密を貫き通した方が、気が楽というもの。

「秘密ですか。ならば、深くは聞きませんよ」

「ありがとう」

潔い性格で助かったと息を吐く。

そうしている間に愛紗は、そそくさと竹刀を片付けて一礼する。

「では、お邪魔しました。お陰で、今後も剣道を続ける決心ができ

ました」

「えっ？ それだけの腕を持っているのに、剣道止めようとしていたの？」

「はい。なんだか最近、剣道を続ける意味が見出せなくて」

一旦は表情を暗くするが、すぐに明るい笑顔で言葉を続ける。

「ですが、北郷さんとの手合わせで決める決意をしました！ もつと腕を磨いて、北郷さんを超えるために！」

話から察するに、どうやら彼女は強くなったがゆえの壁にぶつかっていたようだ。

それを取り越えるために挑戦し、壁を乗り越える決意をした。今ぶつかっている壁よりも、ずっと高い壁を越えるために。

「言うておくけど、俺はもつと強くなるよ」

「ならばなおさら！ 私は強くなってみせます！！」

関羽本人のように真っ直ぐな目と心。

彼女はまさに、あの外史で死んだ関羽の生まれ変わりとんでもおかしくない。

「楽しみにしているよ」

「はい！ では、これで失礼します！！」

爽やかな表情で去っていく彼女だが、そこへ一刀から一言。

「それと俺、年下だから敬語じゃなくていいよ」

これを聞いた愛紗は転び、鼻を押さえながら振り向く。

頭にはクエスチョンマークが出ているように見え、混乱した表情を浮かべている。

こういうとき、スカートでなくて助かったと、後に愛紗は語る。

「えっ？ お、おいくつで？」

「高二、十七歳」

「じゅうなっ……私より三つも年下の人に……。世界は広いな」

最後はしょぼんと落ち込み、すごすごと帰って行った。

「なあ、一刀。今の人……」

「生まれ変わり、かもしれないね」

外史にはあらゆる可能性があった。

その外史で死んだ関羽が輪廻転生し、この世界で生まれ育った。正史と外史が繋がるという可能性がある以上、こんな可能性も否定はできない。

「星、霞、桃香達に会ったら教えてあげようか。愛紗さんはこっちで元気にやっているって」

星と霞に反応しなかった様子から、外史での記憶は無い。

そもそも、本当に生まれ変わかも分からない。

ただ一つ言えるのは、彼女に似た女性がこっちで元気にやっているということ。

「ほな、ウチらはもう一汗流すか」

「そうだな。主、モチカラとやらで槍を出してくれませぬか？」

「いいよ。どうせなら、見た目も同じにしてあげるよ」

モヂカラで自前の武器そっくりに槍を作り、二人に手渡す。

ようやく元の武器を使えたからか、稽古どころか激戦を繰り広げる。そこへ母親が、何かを思いついた表情で星と霞に告げた。

「勝った方は一刀とお風呂に入っていいわよお」

「母さんっ!？」

「なんですと、義母殿!」

「ホンマか!？ おっしゃっ、やったるでえ!!」

この後の二人の激突を、一刀はこのように語る。

二人の背中に龍と虎を模した、過激^{かげき}気が見えた。

ちなみに結果は引き分け、頭を抱える一刀を引き摺り、三人揃って風呂入りとなった。

その間、母親は買い物と称して外出。

三人以外誰もいない北郷家の風呂から、艶やかな声が聞こえたのは不思議ではなかった。

「若い人はいいわねえ」

帰ってきた母親の第一声は、この一言に尽きた。

腰が抜けたのと温まりすぎた星と霞が、部屋で横になって団扇で扇がれていたからだ。

「いや、これは若気の至りというもので」

「若いときは思いつきり、至っておきなさい。年取ってからじゃ無理だから」

どこまでも笑顔な母親に、改めて口では敵わないと悟った一刀だった。

なお、二人は夕飯で酒盛りする頃には、しっかり復活して日本酒と

焼酎を呷っていた。

貂蟬のくれた金で買っておいた分を、しっかりと土産用に確保して。

「あつはつはつ、なかなか旨い酒やなあ」

「うむ。刺激は物足りないが、味の深みは気に入った」

「なんというか、やっぱりこうなるのか」

休日出勤から帰った父親も混じつての宴席。

都の酒好きツートップが絡むだけに、想像以上の盛り上がりを見せた。

翌日、全員が二日酔いになったのは言うまでも無い。

恋姫輪廻【現代】（後書き）

驚きの出会い。

今後彼女は、現代編にちよくちよく顔を出す予定です。

飛將軍の食い倒れ珍道中【現代】

土曜日に押しかけて来た星と霞が酔っ払って帰った翌日、一刀は今日が順番の二人と外出していた。
その二人というのは。

「……ごちそうさま」

天下の飛將軍呂布こと恋と。

「ご主人、時間は？」

隠れた苦労人。

今日は仕事からも解放され、自由の身になった斗詩である。

「じゅ、十分だとお！？」

「それじゃあ、賞金は獲得だね」

この二人に一刀を加えた三人が何をしているかというと、大食い挑戦店巡りである。

理由は恋が行きたい場所として、大食い挑戦店をいくつか選んでいただからだ。

他にも食べ放題などがあったが、そちらは店が可哀想な事になるので却下。

その代わり、電車を使って少し離れた場所へ、大食い挑戦店巡りをしに来たのだ。

何故離れた場所かというと、近所で大食い荒しをすると、出入り禁止を喰らいかねないからだ。

その点、離れた場所なら出入り禁止になっても問題はない。

加えて、食べ放題というわけでもないので、店を潰さなくて済む。

「賞金五千円獲得つと。次はどこに行く？」

「……………ここ」

次のターゲットに選んだのは蕎麦屋。

ネットの情報によると、月見蕎麦を二十分で十杯完食が条件らしい。賞金は五千円。

「よし、早速行こう！」

今日の成果は今のところ、三軒に挑んで全て成功し賞金総額一万八千円。

記念すべき一軒目は特盛オムライス二十分完食で三千円を、十四分で撃破。

続いて一キロのステーキセット二セットを三十分完食で一万円を、二十三分で完食。

そして今出た店で、大盛り天井三杯十五分完食で五千円を、十分でクリアした。

「斗詩はよかったの？ 行きたい所とか」

「そんな。私はこうして自由な時間があれば、充分ですよ」

無欲なのは構わないが、彼女が苦労人たる理由はこれかもしれない。大抵、苦労人とは無欲な人が多いものである。

「それに、こつちの世界の色々な食べ物も見られますし」

最近料理が趣味になった斗詩は、こつちの食べ物に興味を示している。

なので、恋が挑戦中に一刀から、どういう料理でどういう調理法なのかを聞いている。
帰りに今日獲得した賞金で材料を買い、向こうで月と研究するそう
だ。

「一刀、着いた」

地図にあった蕎麦屋に到着し、早速挑戦が始まる。

最初はある女の子が、という空気も完食したと同時に歓声に変わる。

しかも歴代最短の、八分で完食したとあらば。

「楽勝」

「じゃあ親父さん、賞金五千円は貰うね」

完食されて悔しそうな店主から五千円を受け取り、意気揚々と引き上げる。

三人は一旦近くの公園で一休みをしながら、次の店を決める事にした。

「恋さん、次は何が食べたいですか？」

「……………これ」

指差したのはカツ丼。

内容は三十分で十杯完食一万円。

歴代最高タイムは二十八分台。

「よし、じゃあ一休みしたら行こうか」

「はい！」

「ん」

公園のベンチに腰掛けて、平和な一時を満喫しながら休息を取る。ちょうどいいタイミングなので、一刀は二人に気になる事を尋ねた。

「そういえば、都から来られるのは二人で終わりだって言っていたけど、他の人はどうだったの？」

実は今回の試験で条件をクリアした都の代表は、この二人で最後。一刀としては、ねねと七乃が落ちた事は驚きだった。

仮にも軍師なのだから、落ちる事は無いと踏んでいた。

それでも、彼女達は落ちてしまった。

他にも白蓮や蒲公英辺りが通りそうな予感もあったが、あえなく撃沈した。

「それはその……」

「ねね、恋と一緒に来たくて手加減してた」

言いくそな斗詩に代わって恋が口を開く。

なんでもねねは、恋と一緒に現代に来たいがために、何問かをわざと解かなかった。

こっちに来る組み合わせは、合格点を越えた点数順なので、高得点を取ると恋と一緒に来られない。

そこで上手く調整し、一緒になれるように解いたのだ。

「そしたら、自信のあった解答がいくつか間違っていたらしくて」「六十五点」

「……ああ、あるあるそういうの。自信満々で答えたら、間違っているっていうの」

この話を聞いた詠は、それでも軍師なのかと激怒。

罰として竹簡五千本の処理を押し付けた。

「じゃあ七乃さんは？」

「試験日に美羽ちゃんか風邪をひいて、その看病で欠席です」

いかに頭が良くとも、試験を受けなければ受かるはずが無い。それでは、来られないのも仕方がないというものだ。

ちなみに他の面々はというと。

麗羽と猪々子、翠に華雄は文句無しに不合格。

蒲公英と白蓮はあと少しということで、残念ながら不合格となった。

「ねね……手を抜かなければ良かったのに」

「……………後の祭り」

「ですね」

そう言っている恋も、持ち前の勘の鋭さが無かったら危なかった。

選択問題は全問正解。

試験勉強も、張っていたヤマが六割ほど当たってどうにかなったのだ。

「この調子だと、次はどこが来るのかな？」

「さあ？」

国別の来る順番は、各国の平均点次第。

一番手が都と来て、次に来るのはどこの国になるのか。

「予想としては魏なんだけどなあ」

最有力候補はやはり華琳のいる魏。

華琳の他にも桂花、秋蘭と知的な顔がいる。

三羽烏と流琉も決して頭は悪くないので、ちゃんとやれば合格点は取れる。

特に沙和と真桜は欲望が後押しし、やる気が空回りしなければ、かなりの点を取っていいそう。

だが不安要素もある。

それは魏武の大剣と名高い春蘭と、その春蘭に憧れる季衣の二人。この二人に加えて、合否ライン上に三羽烏と流琉がいる。

張三姉妹は、ライブもあるので受けられたかどうか。

当たれば大きい、外れても大きい、正にギャンブルチームとも言える。

「安定感としては呉ですねえ」

基本的に真面目な性格が多い呉には、安定感がある。

軍師三人に加え、真面目で勤勉な蓮華がいる。

思春と明命の二人も、隠密をしているだけあって頭脳労働は苦手では無い。

不安要素なのは、祭の二日酔いと小蓮が勉強をサボるという事だけ。同じサボリでも、天才的勘がある雪蓮は、ヤマを張ってなんとかしてしまいそう。

「……蜀は？」

「ううん。顔ぶれは悪くないんだけど、それどころじゃないからなあ」

蜀の顔ぶれは、決して頭が悪いわけではない。

だが今は蜀の復興にてんやわんやなので、勉強している時間があるだろうか。

要の朱里と雛里も、はわわ、あわわ言いながら走り回っているらし

い。

頼りになりそうな紫苑と桔梗も、仕事に追われ、一応頭は良い桃香も仕事の山に埋もれている。

鈴々と焰耶は桃香のためにと勉強しそうだが、頭が付いてくるかが課題となっている。

「……こうして考えると、試験ってちょっと不公平かな？」

「今更そんなこと言うんですか!？」

一刀の弦きに斗詩が驚きの声を上げる。

その声に足下に集まっていた鳩がいつせいに飛び立ち、恋が落ち込む。

「ああ、ごめんね恋さん。そういつつもりじゃなくて」

「……ぐすつ」

「泣くなつて。ほら、そろそろ行こう。カツ丼挑戦に」

「……うん」

悲しそうに頷いた恋を連れ、一行は再び挑戦店巡りに戻った。

そこから始まった、疾風怒濤の快進撃。

鳩に飛んでいかれた鬱憤を晴らすかのように、次から次に挑戦店をなぎ倒す。

まずは例のカツ丼挑戦を二十六分で片付け。

続いて串カツ五十本、十分以内完食三千円を七分で。

きつねうどん十杯、十五分以内完食五千円を十二分。

五人前の特大お好み焼き二枚、三十分以内完食一万円を二十五分で食べきった。

今の四箇所だけで、合計賞金額は二万八千円。

これに前に獲得した二万三千円を足せば、総額五万千円となった。

「さすがは恋。これだけ食べられるとは」

「お腹は大丈夫？ 少し休む？」

「……もう一軒くらいなら」

まだ食べられると聞くと、改めて恋の胃袋に驚く。

とはいえ、そろそろ限界だろうと考え、最後の挑戦は甘い物にした。

「親父さん、挑戦メニューお願い」

「はいよお！」

威勢よく返事をした店主が持ってきたのは、山のようにつまれたドラ焼き。

「それではドラ焼き五十個、二十分以内に完食。スタート！」

一般客が見守る中始まった、本日最後の挑戦。

最初は皆、恋の食べ姿に見蕩れているが、ドラ焼きは次々になくなっていく。

見慣れている一刀と斗詩以外、誰もそれに気づいていない。

半分を食べた辺りで、残り時間は十三分。

ペースを崩すことなく食べ続ける恋は、そのまま一気に完食した。

「完食！」

「時間は？」

一刀の声に正気に戻った店主が、時計を確認する。

「完食タイム……十五分！？」

驚きのタイムに一般客もどよめく。

見た目はどこにでもいる、普通の少女がドラ焼き五十個を十五分で食べきったのだ。

驚くなというのが無理である。

「ま、まいどあり」

ポカンと口を開けている店主に見送られ、三人は店を出た。賞金と書かれた、五千円入りの封筒を手に。

「はっはっはっ、皆ポカンとしてたな」

「恋ちゃん、お腹は大丈夫ですか？」

「平気。でも、もうお腹いっぱい」

さすがの恋もここまで食べたら限界だった。

同時に斗詩のメモ帳には、食べまわった料理の事がぎっしり書かれている。

「さて、じゃあどうする？ 時間はまだあるよ」

「だったら、お土産買いに行きましょうよ。試験に落ちちゃった人用に」

なんとも斗詩らしい意見だが、反対は無い。

幸い資金は恋のお陰で豊富にある。

足りなければ、例の貂蟬の口座から落とせばいい。

「よし、じゃあお土産買いに行こうか」

という訳でお土産を買いに色々な店に入ったのだが。

「何がいいんだろう」

正直、お土産に困る人が二人ほどいる。

猪々子は保存の効くお菓子を、美羽が蜂蜜でねねは恋があげれば何でも良し。

華雄には辛口の酒を、残念な白蓮には人生観についての書籍。

七乃には美羽くらの年の子に関する、子育て本。

だが、蒲公英と翠、麗羽には何をあげればいいのだろうか。

下手にアクセサリーを渡しても、麗羽は見た目次第だし、武人の翠と蒲公英は身につけそうにない。

「……これは」

恋が指差すのは、観光地などによくある木の彫り物。

しかも北海道でもないのに、何故か鮭を啜えた熊。

「恋、それお土産に貰って一番困る物だよ」

「でも、麗羽様なら適当に言い含めれば、喜びそうですけど？」

「……面倒だから、斗詩の意見採用」

「ええっ、ちよっ、本気で言った訳では」

慌てる斗詩を放って、さっさと木彫りの熊を購入。

言い含めるのは言いだしっぺの斗詩に任された。

購入した熊入りの袋を差し出された斗詩は、肩を落として袋を受け取った。

「後は翠と蒲公英か」

正直、一番悩むところだ。

翠と違ってませていて、年頃な事もあってオシャレにも敏感な蒲公英。

終戦後の祭りの時、沙和や地和と共に服屋巡りをするほど。
そしてオシャレとは無縁な、男勝りな性格の翠。
この義姉妹のお土産は、一番悩むところ。

「仕方ない、こうなったら究極の手段を使おう」

「きゅ、究極の手段!？」

「……?」

どんな手段なのかと見守る中、一刀は服屋に入って一着の服を購入した。

白一色のフリフリな服と、同じフリフリでも黒い服。

この二着の服は、いわゆるゴスロリ服。

「そ、それが究極手段なんですか？」

「ああ。これはな、俺が常々翠と蒲公英に似合うと思っていた服だ
!」

自信満々な発言だが、内容は明らかに自己満足。

とはいえ、確かに似合っていそうなのも否定できない。

黒いゴスロリ服の翠と、白いゴスロリ服の蒲公英。

対極する色のゴスロリ服を着た義姉妹を想像し、納得の表情を浮か
べる一刀。

満足そうな笑顔を浮かべて金を支払い、二着のゴスロリ服を購入し
た。

「さて、そろそろ帰ろうか。恋、晩御飯は何がいい？」

「……ちらし寿司っていうの」

「了解。斗詩、母さんに連絡入れて買い物に行くよ」

「はい」

お土産を手にも、帰りの電車に乗り込む。

こうして苦労人と食いしん坊の、現代における休日は終わった。

その日の夕飯は、恋の食欲を知った母が大量に作ったちらし寿司。

恋はそれを、おひつ五杯分完食した。

テーブルに並ぶおかずも食べた上で。

本日、恋が大食い挑戦店で食べた料理

特盛オムライス

一キロのステーキセット二セット

大盛り天井三杯

カツ丼十杯

串カツ五十本

きつねうどん十杯

五人前の特大お好み焼き二枚

ドラ焼き五十個

獲得賞金総額五万六千円

飛將軍の食い倒れ珍道中【現代】（後書き）

フードファイターとして、生きていけそうな恋。
次回から一刀は夏休みに入ります。

恋姫の使いやあらへんで part 1【外史】

一刀の世界にも、ようやく夏休みが訪れた。

これを期に一刀は外史にしばらく泊り込む事にした。

両親と祖父から、あれこれ持たされて。

それを聞いた各国首脳陣は、一刀が来る五日前から仕事に邁進。

無事に重要な案件を片付けて、しばらくの間、洛陽に遊びに来た。

同時に月達も蜀での仕事を終わらせて帰還。

そして現在、せっかくなので国対抗の遊びをしようという事になった。

その舞台は。

「第一回、笑ってはいけない洛陽二十四時！」

『わあああつ！』

一刀による開会宣言と共に、中庭に集まった面々が沸き立つ。

これは現代において、年末を飾る番組の一つから選んだもの。

各国一名ずつ代表を選出し、これに参加。

さらに代表選考で漏れた者でくじ引きを行い、見事に当選した特別枠の人物を含めた五名で行なう。

案内等は一刀がこなし、代表以外の将や軍師は御仕置き隊や笑わせ組に入る。

勿論、城内勤務の兵士や文官、侍女もグルになって笑わせようとする。

笑わすためのネタは、代表者以外が丸一日掛けて考えたもの。

その笑いの巣窟と化した城で過ごす各国の代表者は、以下の五名である。

都代表・翠

呉代表・明命
魏代表・沙和
蜀代表・桃香
特別枠・季衣

「さあ、代表者の皆さんに集まっていたいただきました。これより、ルール……もとい規約を発表します」

代表の五人が集まった中庭で、ルール説明が行なわれる。

- ・これから丸一日、五人には新兵として城内に勤務してもらう
- ・その勤務中、二十四時間の間に笑ってはいけない
- ・笑った場合はキツイ御仕置きが待っている
- ・目、耳、口を手で塞いではいけない
- ・武器の持ち込みは禁止
- ・一番笑っていない人の国が優勝、優勝者と他一名は無条件で現代に行く権利を得る
- ・一緒に行ける人を選ぶ権利は、優勝者にある
- ・最も笑ってしまった人には、罰ゲームが待っている

簡単なルール説明をして質問がないか尋ねると、沙和が手を挙げる。

「はあい、しつつもおん！ 御仕置きや罰げえむって何？」
「それは秘密だけど、せいぜい腫れる程度だから安心して」

腫れる程度と言われても、逆に気になってしまう。
せいぜい、という事はたいした事ではないだろうが、おそらく殴打系だと思われる。

「あうあう。あんまり痛いのは嫌です」

「大丈夫だって、紙製だからたいした事ないよ」

紙製と聞いて、どんな形状なのかと各々で推測する。

だが、所詮は紙だと誰もがすぐに自己完結した。

全員が納得したようなので、一刀は五人を城の入り口に連れて行く。

「ここから先に踏み込んだ瞬間、ゲームスタートだ。覚悟はいいかな？」

最後の確認を取る一刀に、五人揃って頷いてみせる。
そして、初めの一步を踏み出した。

「それじゃあ、ゲームスタート！」

開始の合図と共に銅鑼が鳴り響き、城内にいる将達に開始を告げる。
城に入った五人は、まず扉を潜って最初の角を曲がる。
するとそこに、早くも笑いの仕掛けがあった。

「えっと、まずはこれがこの城の自慢の銅像だ」

いきなり目の前に現れたのは、歯が光るほどの爽やかな満面の笑みを浮かべ、台の上でボディビルポーズを取る貂蟬と卑弥呼だった。

『ぶふうっ！』

いきなりの奇襲攻撃に、思わず全員が吹いてしまう。

普通なら気味悪がるのだが、現代講習で見慣れていたために、思わず笑ってしまった。

というより、初っ端から最終兵器な二人が出てきた事が、吹いてしまった大きな要因だろう。

ちなみに本当の銅像ではなく、本人達にやつてもらっている。
すると一刀が笛を吹き、無情の宣告をする。

「全員、アウト」

宣告と共に、どこからともなく春蘭と恋、鈴々と蒲公英に思春が現れる。

その手には紙製のハリセンが、しっかりと握られている。

やってきた五人は何が起こるのかと困惑する五人の背後に立ち、ハリセンで思いっきり五人の尻を叩いた。

「いてっ！」

「あうっ！」

叩いた五人は役目を終わると、あっという間に天井裏や別室へと走って姿を消す。

当の叩かれた五人は尻を押さえ、これが御仕置きかと理解した。

「じゃあ次に行くよ」

叩かれた箇所を撫でながら、一刀の後を付いて行く五人が連れて行かれたのは受付所。

ところが、その受付所には誰一人いない。

あるのは受付という札とハンドベルだけ。

「じゃあ、ここで受付を……って、受付嬢がいらないな。呼び出さなきゃ」

呼び出しの際はお使いくださいとあるハンドベルを鳴らし、受付嬢を呼ぶ。

すると近くにあった扉が開き、ひよっこりと亞莎が顔だけ出す。

「な、な、な、何か、用でしょうか？」

扉からちよつと顔を出して、緊張でガチガチの時の口調で用件を尋ねる。

ちなみに見えていない制服部分は、一刀がモチカラと想像力をフル回転して作った、エプロンドレスだったりする。

「受付をお願いしたいんだけど」

「は、はひ、分かりました」

五人と一刀の視線で恥ずかしがりながら、こそこそと出て来る。

いつもの服じゃないのに、袖で顔を隠そうとする姿に思わず桃香がクスツと笑ってしまう。

「桃香、アウト」

「えっ！？ あっ、しまった！ 痛いっ！！」

気付いたその時には、既に蒲公英に尻を叩かれる寸前だった。

役目を終えた蒲公英は、隠密顔負けの身軽さで天井裏に戻って行った。

「で、では、これに署名を」

差し出された受付用紙に五人が順番に名前を書く。

これで受付は終わりと思いきや、そうは問屋が卸さない。

どこからか足音が聞こえ、その方向を向くと雛里が右手で顔を隠しながら現れた。

勿論、亞莎と同じエプロンドレス姿で。

「あわわ、お疲れ様です。すみません、遅刻してしまいました」

恥ずかしがり屋二名による受付に、五人は笑いそうになるのを必死に耐える。

「あうう。どうされたんですか？」

「あわわ。ちよっ、ちよっと本を読んでいたら寝過ごして」

たどたどしく理由を話しているが、その離りは左手を背中に回して何かを隠している。

亞莎からは見えないが、五人にはそれが何か見えていた。

何かというと、今日から君も八百一作家という貂蟬と卑弥呼の顔がドアップで描かれた表紙の入門書だった。

「ぷはっ！」

「くくっ！」

「桃香、沙和、アウト」

アウト宣告に蒲公英と春蘭が出現。

ハリセンで二人の尻を叩いて颯爽と帰っていった。

「さっ、次行こうか。今日お世話になる、軍隊本部に挨拶に行くよ」

耐え切った三人は次に備え、叩かれた二人は涙ながらに尻を擦って後に行く。

連れて来られたのは、軍隊本部と書かれた表札のある部屋。

ここは本来書庫であり、この日のために内装に手を加えて準備した部屋だ。

本棚はそのまま、机や椅子を運び込んだただけだが。

「そうそう。ここにあるのは、重要犯罪者の顔だ。見つけたら、しっかり捕まえるように。ほら、ちゃんと見て覚えておいて」

部屋の入り口には指名手配所が貼られている。

貼られている顔の絵は、どれも想像で書いた人物なので本人はいない。

顔の下にはその人の罪状と、賞金が書かれている。

一つ一つ順番に見ていくと、五人の目にある手配書が止まった。

『ぶふうっ！』

その内容に、翠と明命、桃香に季衣が思わず吹いてしまう。

唯一沙和は唇を噛み締めて耐え切った、その手配書の内容はというと。

あらあらと、困っているような素振りを見せながらも笑っている、紫苑の顔絵。

そしてその下の罪状は。

年齢詐称罪

ちなみにこれを考案した真桜は、今朝方テルテル坊主の格好で中庭に吊るされている所を発見された。

「翠、明命、桃香、季衣、アウト」

当然ながら、笑った四人はハリセンで尻を叩かれる。

「ほら、早く入りなよ」

ここでお偉いさんに挨拶をすると告げ、扉を開ける。
するとそこには、多くの兵士や文官が忙しそうに仕事をしていた。
周りをキョロキョロする五人は、一刀に連れられて本部長と書かれた札のある席に連れて行かれる。

「本部長、本日一日お世話になる五名をお連れしました」

背中を向けて座っている人物は、大きな背もたれが邪魔で誰かが分からない。

ここで確実に何かあると、各々で考えを浮かべる。

（まさか、また貂蟬か卑弥呼じゃねえよな？）

（お猫様だとしても、耐えてみせます）

（南蛮の人なら、まだなんとかなると思うの）

（まさか璃々ちゃんって事は……）

（変なお面とか付けているのかなあ？）

緊張した面持ちで待ち構える中、椅子が回転して本部長が姿を現す。

「おう、よく来たじゃねえか」

『ぷっ、はははははっ！』

回転して正面を向いた椅子の上に居たのは、人どころか人形だった。
そう、いつも風の頭の上にいる宝慧だ。

これはさすがに予想できず、明命が辛うじて耐えたが他は笑ってしまった。

「翠、沙和、桃香、季衣、アウト」

宣告をすると扉が開いて御仕置き隊が現れる。

明命が笑っていないので思春の姿は無いが、他四名は笑った四人の尻を叩いて去って行く。

「うう……地味に痛いよ」

紙製とはいえ、叩くのは恋や春蘭達とあって痛みは意外とある。

叩かれた瞬間もそうだが、後にジワジワと痛みが残るのだ。

御仕置きが終わったので、本部長席に乗っている宝慧は、改めて話を再開する。

「俺が本部長の宝慧だ。お前達が新人か、なかなかいい面構えだな」

腰の辺りに手を当てた宝慧が、ジロジロと五人の顔を見る。

正直、こんな滑稽なシーンは見ている方が笑ってしまいそうになる。見られている五人も必死に笑いを耐えながら、次の発言を待つ。

「よっしゃ、これからお前達がすぐに軍に馴染めるよう、あだ名を考えてやる」

「よかったなお前ら。本部長にあだ名を付けてもらえるなんて、大変名誉な事だぞ」

そんな事言つて、どうせ変なあだ名を付けて笑わせる気だろうと、全員が心の準備をする。

「まずお前は……」

最初に指名されたのは翠。

脳筋だとか、単純だとか、その辺りを突いてくるだろうと思われたが……。

ここについて計画会議で話し合っている時に、キュピーンと何かが

蒲公英に届いた。

それは別の外史では、翠にとって特徴的な事だった。

「おもらし」

『ぶはっ！』

想定外のあだ名に、翠以外の誰もが耐え切れずに吹き出す。

四人が御仕置きを受けている間、翠は真っ赤になって抗議をする。

なお、考案者の蒲公英は天井裏で腹を抱えて必死に笑いを堪えている。

同じく天井裏に控えている、思春に口を抑えられて。

「ちょっと待て！ 私は赤ん坊の時以来、おもらしなんてしていないぞー！」

「分かっているんだけどよ。こう、ビビツときたんよ」

「意味分かんねえよ！ だあぁっ！ー！」

頭を抱えて悶える翠を放って、次の標的に目を向ける。

「次にお前だが……」

次に指名されたのは明命。

隠密として、感情を抑える訓練と参加しながら、早くも御仕置きを受けてしまった。

名誉挽回のためにも、ここから先は意地でも耐えてやると腹に力を入れる。

「そうだな……ぬこ魂」

『ぐっ……ふう』

一瞬笑いそうになったが、どうにか全員耐えてみせた。
ちなみにぬこ魂とは、猫魂を一文変えてみたらしい。
猫魂では、いかにもそのまま面白みに欠けるというのが、宝慧の
言い分だ。

「そんでお前が丸眼鏡、そっちは爆食でいいだろう」

続けて沙和と季衣のあだ名を告げるが、特に笑わせる要素は無い。
どうやら最初の二人だけだったのかと、油断した瞬間だった。

「最後にそっちの姉ちゃん……平均以上は巨乳のみ」

「なっ!？」

『ぶはははっ……あっ』

「翠、沙和、明命、アウト」

ガンとショックを受けて笑うところではない桃香と、辛うじて耐
えた季衣。

だが隙を突かれた三人は笑ってしまい、ハリセンで尻を思い切り叩
かれた。

この後、しっかりやれよと言われた五人は一刀に連れられて、仕事
場へと連れて行かれる。

道中、城内の施設を案内されるが特に変わった様子は無い。

部屋の配置を帰るならまだしも、廁や厨房の位置が変わる事はある
えない。

「ここがお前達の仕事部屋だ」

連れて来られた部屋には、人数分の机と椅子が置いてある。
机にはそれぞれの名札が置いてあり、座席も指定されているようだ。

「じゃあ、しばらくここで待機していてくれな」

そう言い残すと、一刀は部屋を出て行った。

ようやく訪れた平穩に、五人はそれぞれの席に座って溜め息を吐く。痛む尻を擦りながら体を机に預け、ぐったりとする。

「まだ、始まったばかりなんだよな」

「先が思いやられるの」

「見る物全部を疑っちゃうよね」

早くも疲れが見える翠と沙和と季衣は、正直こうしている間にも何かが起きるのではと内心ビクビクしている。

「あうあう。感情を抑えるいい訓練だとは思って参加しましたが、想像以上に辛いです」

まるで猫に逃げられた時のように涙目になる明命。

怒りを抑えるのは隠密業で慣れているが、笑いを堪えるのは慣れていない。

それ故に、既に御仕置きを何度か受けてしまった。

「うう……お尻が痛いよお」

疲れや情けなさを通り越して、この段階で泣きが入る桃香。

だが、始まったものは止まらない。

控え室で焰耶が止めに入ろうとしていたが、祭と桔梗の手でテルテル坊主の刑に処せられてしまった。

今は控え室の天井から、太いロープによって吊るされている。

勿論、首ではなく胴体にロープを縛られて。

「そういえばこの机、引き出しが付いているの」

落ち着いた事で余裕ができた沙和が、いまさらながら机の特徴に気付いた。

この机は一刀がモチカラを使い、準備した現代風のオフィステープル。

手前に横長の引き出し、左側には縦に重なっている引き出しがある。

「何か入っているのかな？」

何気ない季衣の一言だが、他の四人は瞬時に気付いた。

絶対に仕掛けがあると。

だが季衣は、そんな事に気付く事無く手前の引き出しを開けてしまう。

誰もが身構え、何が飛び出てくるのかと脅える。

しかし、それは杞憂に終わった。

「なんだ、空っぽじゃん」

『ほっ』

空っぽと聞いて、正直ほっとした。

季衣は横にある引き出しも上から順に開けるが、結局何一つ入っていないかった。

「ちえ、つまんないの。皆のには何か入ってる？」

背もたれに寄り掛かりつつ、他の四人にも尋ねる。

問われた四人は、季衣の処に入っていないだけで、自分の処には入っているかもと恐怖する。

「やっぱり……開けなきゃ駄目か？」

「駄目なんじゃないか？ ほら、そこ」

翠が指差した先には、必ず引き出しは開ける事と書かれた張り紙がある。

開けなければ、御仕置きが待っているという添え書きまで書かれている。

このまま開けずにタダで御仕置きを喰らうよりは、耐えられる可能性に賭けてみる。

四人は意を決して、順番に引き出しを開ける。

「じゃあ、まずは私が開けるの」

魏の罵倒將軍と呼ばれる沙和が先陣を切る。

周囲の見つめる中、一つ一つ順番に引き出しを開ける。

何も起こらないまま、左側二段目の引き出しを開けると、遂に何かが現れた。

「これ……何？」

出てきたのは、五つの結ばれた紙と説明書。

説明書には、一人一つずつ開けるようにとある。

おそるおそる一つずつ手に取って、順番に開けていく。

桃香、翠、季衣の紙には当たりと書かれている。

ところが、沙和の開いた紙にはハズレと書かれていた。

『沙和、アウトオ！』

「ええええっ!？」

おそらく妖術を使っているのだろつ、どこからともなく地和の声が室内に響く。

そして現れる御仕置き隊の春蘭。

手早く沙和の尻を叩くと、さっさと出て行ってしまった。

「こ、こういう事だったのかよ」

「危なかったあ」

ほつと胸を撫で下ろす中、最後の一つを明命が開ける。

中には当たりとあつたので、安心して大きく息を吐いた。

この後、桃香の引き出しから無害な真っ白い粉が噴き出し、真っ白になった桃香に翠と季衣が撃沈。

翠の机からは何も出なかったが、明命の机から風の食べかけのペロキャンが出てきて明命撃沈。

「……この後、何が待っているんだろうね」

「さあ」

用意されていたお茶を明命が淹れ、それを飲みながら、五人はこの後がどうなるのかを想像し恐怖する。

おまけの裏方情報 提案者と王達

御仕置きをされて騒ぐ姿を別室でモチカラを使って見ながら、仕掛け人達は笑みを浮かべる。

「ふふふつ、なかなか面白いじゃない」

こういう事に興味が尽きない華琳が、五人の様子を見ながらクスク

ス笑う。

「だろ？ 蓮華、ちゃんと御仕置きの回数数えている？」

「勿論だ。それにしても、ああも簡単に笑うとは、明命もまだまだ訓練不足だな」

「仕方ないですよ。怒りや気配は制御できても、笑いを我慢する機会なんて隠密にはないでしょうし」

同様に一刀と蓮華、月も喋りながら観察を続ける。

他の面々もその様子を面白おかしく見物しながら、この先の仕掛けの準備を整える。

御仕置き隊も一時戻ってきて、水分補給をしながら休憩に入る。飲み水を配り終えた凧は、ある事を思い出して一刀に進言した。

「そういえば一刀様、焰耶殿は無事でしょうか？」

「ああ、そうか。流琉、華雄、悪いけどそろそろ下ろしてきてあげて」

「分かりました」

「任せておけ」

テルテル坊主の刑を受けている焰耶を助けに、指名された二人が控え室を出て行く。

「うふふ。さあ、この子達はこの後、どう楽しませてくれるのかしら？」

満面の笑みを浮かべる華琳の表情が、この先の出来事を物語っているようだった。

恋姫の使いやあらへんで p a r t 1 【外史】 （後書き）

まだまだゲームは始まったばかり。
時間はたっぷり残っている。

恋姫の使いやあらへんで part 2【外史】

笑ってはいけない洛陽二十四時が始まって、未だ一時間半。

早くも御仕置きのせいで尻が痛くなつた五人の下に、秋蘭が現れた。

「おい、お前達。これから新兵研修が始まるから、すぐに着替えて中庭に集合だ。着替えはそこにあるそうだから、それに着替えて来るんだ」

机の仕掛けを全て出し終え、ようやく休めると思つて十分もしないうちに集合。

安息の時はないのかと、五人は重い足取りで着替えを取つて更衣室に入る。

やがて出てきた五人の格好は、所謂体操着という物。

残念ながら一刀が提案したブルマは、嫁連合の冷たい視線で却下、代わつて短パンが用意された。

これが現代講習の欠点か、と呟く一刀は印象的だった。

なにはともあれ、秋蘭を先頭に五人は中庭に向かう。

連れられた中庭には、既に多くの兵と数人の将が並んでいる。

「じゃあ五人共、順番は適当でいいからこの辺りに並んでくれ」

指示された場所は都合よく五人分開いていた。

しかも最前列の中央という、本来ならあまり立ちたくないポジションだ。

とはいえ、自分達を笑わそうとしているのだからと、渋々横一列に並ぶ。

全員が揃つたのを確認し、秋蘭が脇に控えたまま声を上げる。

「これより、新兵研修を開始する。まずは今日、お前達の担当になる教官を紹介する」

後は頼むと秋蘭が後ろを振り向いて誰かを呼ぶと、背後から一人の人物が前に出て来る。

その人物は魏が誇る武人の一人、引かずの楽進とも呼ばれる風。このまま胸を張って、堂々とした態度で前に出るのかと思いきや。

「どわっ！ がぶあっ！？」
『ぶっ！』

小石も窪みも何も無い処でいきなり転んだ。普段の風を知っている季衣と沙和は、笑いを堪える事ができなかった。

同時に中庭に響き渡る、アウトの宣告とハリセンで尻を叩かれる音。そして御仕置き隊が引き上げる足音。

御仕置きをしている間に起き上がった風は、土を払って何事も無かったように喋り始める。

「ええっと、見苦しい処を見せた。私が今回、お前達の訓練を見る警備隊副隊長の楽進だ。断っておくが、手加減抜きで厳しくいくかな。やる気の無い奴は、すぐに辞表を書いて辞めてしまえ！」

彼女らしい発言に兵士や将達が姿勢を正し、はいと元氣良く返事をする。

遅れて五人も挨拶をするが、返事が遅れたので風が睨んでくる。

「貴様ら、今の遅れが実戦で陣形を作る遅れだった場合、それがそのまま死に繋がるぞ！」

『は、はい！』

「はい、じゃない！ お前達は返事の前と後にサーを付ける！
いなー！」

『サ、サー、分かりました、サー！』

普段なら沙和がやっている訓練方法を尻がやると、やけに迫力を感じる。

ただでさえ厳しめの彼女の訓練に、沙和並の海洋式が加わると手が付けられない。

さすがに罵倒まではしていないが、充分普段より厳しく思えてしまう。

「では今日の訓練を始める。その五人、お前達は私が直々に見てやる。心してきやきやりえっ！？」

『ぶくくっ』

ここまで厳しく、真面目な彼女らしい号令をしていた。

それが途中で噛んで、口を抑えて可愛らしく蹲ってしまった。

勿論、これも演技だ。

この緩急の差に桃香が耐え切れず、吹き出してしまった。

「桃香アウト！」

「びいびいびいっ！」

まるで美羽のような泣き声を上げても、御仕置きの手は抜かない。
容赦ない蒲公英のアウト宣告と一撃を尻に浴び、痛さからかやや前屈みになってしまう。

「あうう、お尻が痛くて座れなくなっちゃうかも」

痕が残らないか心配している間に、尻が復活して再度号令を掛ける。

「各自解散！ 所定の位置で訓練に入れ！！」
『了解！』

敬礼を取った兵士達が駆けて行き、それぞれに将がついて指導に当たる。

取り残された五人の下には風が歩み寄り、ジロジロと眺める。

「お前達の事は宝慧本部長から、よく聞いてきた。お前達は今日一日だけらしいから、特別訓練をやってもらう」

特別訓練という言葉に、五人が揃って色々な想像をする。
無茶をやらされるのか、それとも笑いのネタを延々と見せられ続けるのか。

どっちで来るのかと考えていると、風の一喝が飛んできた。

「こら、何を余計な事を考えている！」

「あつ、ご、ごめんなさい」

「違う、返事の前後には必ずサーを付けると言っただろう！ それと姿勢が悪い！！」

『さ、サー！ すみません、サー！！』

姿勢を正して返事をするが、未だに風の怒っている様子は続いている。

「そういえば、お前達は本部長にあだ名を付けてもらったそうだな
『サー！』 そうですね、サー！！」

「よし、なら私もそのあだ名で呼ぶことにしよう。では五人とも、訓練を始めるからこっちへ来い」

遂に何かが始まると連れて行かれたのは、壁際にあるやや広めのスペース。

徒競走のように人数分の走るラインが書かれており、そこに五人が並べられる。

ここでどんな訓練をするのかと思いきや、凧は少し離れた場所に歩いて行った。

「じゃあまずは、お前達の基礎体力を見る。呼ばれた順に、合図をしたらここまで走って来い！」

それを聞いて五人は安心した。

普通に走るだけかと。

ところが、この油断をした隙を突いてモチカラで作ったメガホンを凧が取ると、いきなり大声であだ名を呼ぶ。

「よし、まずはおもらし！」

『ぶっ、はっはっはっ』

「全員アウトオ！」

いきなり真面目な顔でおもらしと言われたので、全員が笑ってしまった。

今のは、宝慧が付けたあだ名で翠を呼んだだけなのだが、真面目な表情で凧が言うだけで、これだけの破壊力を実現している。

「ひいひいん」

「あうあう、お尻が腫れちゃいます」

「御仕置きがこれなら、罰ゲームは何なんだろう？」

最後の季衣の一言に寒気を感じつつ、五人は改めて離れた場所にいる凧に目を向ける。

「ではいくぞ、準備はいいか？」

「サー！ いいであります、サー！！」

半ば自棄気味に返事をする翠。

走り出す体勢を取り、合図を待つ。

「いくぞ！ ようい……ドン！」

合図と共に走り出す翠。

戦場を駆け巡り、母に馬騰を持つだけあって身体能力は高い。かなりの速さで走り、このままゴールかと思われたが。

「へへっ、楽勝楽しよ……おおおっ！？」

急に悲鳴を上げたと思ったら、そのまま翠が消えた。

「す、翠ちゃん！？」

「あうあう、翠さんが消えてしまったのです！」

「何をしているんだ皆、すぐに見に行つて来い」

スタート地点にいた四人は驚いて、秋蘭に促されて駆け寄る。

するとそこには、人が一人辛うじて入る穴があった。

四人が穴の中を除くとそこには。

「助けてくれええっ！」

『あっはっはっはっ！！』

一番底まで落ちず、途中で嵌って身動きが取れない翠がいた。彼女の胴回りならギリギリ通れるのだが、彼女の場合は胸が大きい。

故に胸が引つ掛かつて途中で嵌っていたのだ。

さらに、この仕掛けが上手く機能するように、下に行くほど穴が狭くなるようにしたのだ。

これが笑えないはずがない。

隠れて様子を見ている蒲公英も、自分が作った仕掛けが成功したので腹を抱えて笑っている。

笑ってしまった四人が御仕置きを受けると、どうにか翠を救出した。

「戦場では何が起こるか分からないぞ。もっと注意しろ」

「不意打ちにもほどがあるだろ！」

そうは言っても、今のはただの訓練だと油断した翠にも責任がある。

「じゃあ次、丸眼鏡。早く戻って合図を待て」

「サー、了解でありますの、サー！」

返事をして元の位置に戻る四人を、翠は秋蘭の隣でいじけながら眺めていた。

同時に、お前達にも何か起きると睨みつける。

ラインは人数分あり、それぞれが指示された場所に立たされた。確実に何かあるというのは、残る四人も分かっている。

「では、ようい……ドン！」

合図が出て沙和が走り出す。

身体能力はそれなりに高いので、なかなかの好タイムを出しそうだ。これが普通の徒競走ならば。

「いやあああつ！」

悲鳴が上がると同時に、やはり沙和の姿が消える。
早く見に行けと秋蘭に言われ、おそろおそろ見に行くと。

「ううう……助けてなの」

『ぶはっ！』

沙和の姿に翠と季衣が笑ってしまう。
いったい、どんな姿なのかというと。

落とし穴に埋まっているのは首から下だけ、つまりは。
ほとんど晒し首状態。

沙和の身長を考えて真桜が掘った、沙和専用の晒し首落とし穴だ。
笑った二人が御仕置きを受けている間に救出され、翠と同様に秋蘭
の傍でいじける。

「次、ぬこ魂！」

「は、はい……さ、サー、イエッサー！」

普通に返事をしようとしたら睨まれたので、慌てて訂正してスター
トの構えを取る。

「よっい……ドン！」

隠密として生きてきた明命の脚は速い。

さらに全速力で走りながらも、多少のことは考えることができる。
そうして出した結論は、足場が緩んだ瞬間に跳んで落とし穴を飛び
越える。

自分ならできると信じ、助走の意味も兼ねて全力で走る。
やがて半分くらいに到達すると、足場が緩く感じた。

「ここですー！」

素早く跳び上がると、足場が崩れて落とし穴が姿を現した。
中には何も仕掛けが見えず、どうやら普通の落とし穴だったようだ。
これなら落ちても良かったかなと、油断して着地した瞬間だった。

「みやあああつ!？」

明命なら飛び越えると考え、すぐ先にもう一つ落とし穴を掘っておいたのだ。

しかも、効果はこれだけではない。

せっかく飛び越えたのに、結局は落ちるのかと四人を笑わせる策。
見事にそれに引っかけた四人は笑い、御仕置きを受ける。

平行して明命も救出され、先の二人同様に秋蘭の傍でいじける。

「さあ、どんどん行くぞ！」

この後、足下ばかりに気を取られた季衣が、別の演習部隊から飛んできた玩具の流れ矢に命中。

明命と桃香が撃沈。

最後に桃香が、普通に落とし穴に落ちた。

ただし、落ちた本人は騒いでいるものの、実際はひざ下程度の深さで騒ぐほどではなかった。

その様子に、見ていた四人全員が撃沈。

「よし、次は腕力だ。お前達には、ここにある箱を持って、秋蘭様の所に行って戻って来るんだ」

いつの間にか用意されている、五つの箱。

それぞれ大きさが違い、中には人が入れそうな大きさの箱もある。
これらの内のどれかを持って、秋蘭の所で折り返して戻ってくる。

これを三セット繰り返すのが、この訓練の内容だ。

「どれを運ぶかは、クジで決める。箱はこの訓練が終われば開けてよし。欲しければ中身はくれてやる」

中身をくると聞いて、何が入っているのか気になる。

訓練後の喉の渴きを癒す水分か、それとも空腹を満たす食べ物か。はたまた、何かの罠が仕掛けられているのか。

不安と期待を抱えながらもクジを引き、運ぶ荷物は決まった。

一番大きい人が入りそうな箱は季衣が、逆に一番小さい箱は桃香が運ぶ事になった。

ちなみに一番小さい箱でも、厚さは十センチ程度だが、面積は畳一畳分ある。

「よし、決まったな。じゃあ順番に行くぞ！」

『サー、イエッサー!!』

ここからしばらくは、どこからどう見ても普通の訓練だった。

与えられた箱を抱えたり担いだりして、秋蘭の所で折り返して戻ってくる。

だが、決して楽に終わった訳ではない。

「ななな、風ちゃあああん！ これ、とても軽いけど中に何かいるの！ ごそごそ動いてるのお!!」

「ううん、見た目より重くないなあ」

「うわ、何これ!? 一番小さいのに凄く重い!!」

「あうあう。なんでしよう、凄く嫌な予感がします」

「ちよっとはマシな物が入っていればいいけどな……」

上から、沙和、季衣、桃香、明命、翠の順番だ。

中に何が入っているのかは今のところ不明だが、やはり何か仕掛けがある模様。

特に沙和などは、中身が動いているせいで涙目になっている。なにはともあれ荷物持ち三往復を終わらせ、遂に運命の時間がやってきた。

「よく頑張ったな。それじゃあ、箱を開けて構わないぞ」

開けていいと言われた五人は、息を吞んで順番に蓋を開ける。まずは一番小さいながらも、凄く重いと桃香が言っていた箱。厚さ十センチ、畳一畳分の面積の箱の中には。

一刀がモチカラで作った三キロのダンベルが、これでもかと詰められていた。

「ちよつ、道理で重いと思ったよ！」

「これ、何貫くらいあるんだろう？」

結局中身は、季衣が訓練用にと流琉の分を含めて四個貰った。続いて箱を開けるのは、中身が動いていたという沙和。

猫か、ネズミか、はたまた蛇か。

緊張しながら開けた箱の中には。

宝慧が入っていた。

「本部長おおっ！？ 何をしているんですかぁ！！」

『ぶふうっ！』

よつ、と手を上げる宝慧と叫ぶ風に、あまりの間抜けさから全員が吹いてしまう。

五人が仲良く御仕置きを受けている間に、宝慧は風に回収されて頭の上に戻った。

「やられたのお」

「まさか、宝慧が入っているなんて」

「確かにアレも動くけど、反則だろお」

しかも中身が貰えない。

続いて縦長な箱を開けた翠の箱の中身は、あだ名への嫌がらせなのかと叫びたくなるほど、モチカラで作った大量のオムツが入れられていた。

「あつはっはははっ！」

「腹筋、腹筋が切れそうなお！」

「翠ちゃん、笑って、ごめんね。けど、これは笑わずには、あはははっ！」

「す、すみません。悪いとは思っても、きゃはははっ！」

爆笑しながらも御仕置きを受ける四人に背を向けて、翠は大声で叫んだ。

これを選んだのは誰だと。

ちなみに、これを考案したのは、あだ名を考えた従妹の蒲公英だったりする

結局誰も欲しがることなく、大量のオムツはモチカラに戻って霧散。次に箱を開けたのは、明命。

唯一円柱の形をした箱の中には、たくさんの札が入っていた。

「なんででしょう？」

一つ取り出してみると、そこには大きな字でハズレと書かれていた。

「ハ、ハズレっ！？」

「てことは、当たりもあるのか？」

気になった翠が中身をぶちまけ、それを全員で一つ一つ確認する。
やがて明命が、当たりの札を見事に見つけた。

「やりました！ 当たりを見つけました！！」

嬉しさから札を手にとって掲げるが。

「明命、悪いがアウトだ」

「ええええっ！？」

前に沙和が机の引き出しのくじ引きでやったのと、同じネタだった。
しかも今度は、当たりがアウトという逆の結果で。

「あうあう……見事に裏をかかれました」

思春に叩かれた尻を押さえ、最後に蓋を開ける季衣の所に向かう。
人が入れるほど大きい箱だけに、中身に対する不安と期待も大きい。
五人が注目する中、開かれた箱の中には。
顔中に残念と書かれ、体中には影が薄いと書かれた紙を張られた白
蓮が縛られて入っていた。

「白蓮ちゃああんっ！？」

『あっはっはっはっはっ、ひ、ひいいい！』

「うぐ、うぐうぐ」

笑うなど言っているようだが、笑わせるのが今回の主旨だ。

ぴったり嵌った箱の中では身動きが取れず、猿轡で声も上手く出ない。

こんな姿の彼女を気遣うのは桃香だけで、残りの四人は御仕置きを受けていた。

結局白蓮は、洗っても三日は落ちない墨の文字を残したまま、すぐ退場した。

「よし、訓練はここまで。各自、次の任務までしっかりと休むように！」

風の号令で、ようやく訓練は終わった。

部屋に戻る五人の足取りは、とても重かった。

おまけの裏方情報 一刀一時離脱

「ただいま戻ったのですよお」

宝慧を回収して戻ってきた風が仕掛け人達の部屋に戻ってきた。

周囲のお帰りという声に反応しながらも、キョロキョロと辺りを見渡す。

「稟ちゃん、稟ちゃん、お兄さんはどこだい？」

「なんです？ その言い方は」

「気にしないでくださあい」

相変わらず飄々としている相方に首を傾げつつ、一刀の行方を口にする。

「一刀殿なら、VSシリーズで本家が留守なので、別の場所に出た外道衆を倒してくるそうです」

「なんですかあ？ ぶいえすしりいずって」

「さあ？　ですが、すぐに戻ってくるそうなので、代理は秋蘭殿がするそうです」

「なるほど、それでお兄さんがいなかったんですか」

詳しくは劇場で、と言える人物は残念ながらここにはいない。

ちなみに別の場所とは、海の荒くれ者戦隊が戦った外道とは別の場所の外道だ。

「それより大変でしたね、軍隊本部での吹き替えは」

「まったくですよ。何が悲しくて、机の下に隠れていなければいけないんですかあ」

それが風の役割だからと、稟が告げると風の頬が膨れる。

機嫌が直ったのは、現代から一刀が戻ってきてからの事だった。

恋姫の使いやあらへんで part 3【外史】

訓練の時間を終えて部屋で休憩する五人。

しばらくは何も無い事を願い、翠と沙和が厠に向かう。並んで廊下を歩いていると、前から誰かが歩いてきた。やってきたのは御仕置き隊にいるはずの思春。

しかも、縄を持って何かを引き摺っている。

軽く会釈して、擦れ違い様に引きずっている物に目を向ける。

それは、腹の処に食用肉と書かれた美似、ミケ、シャム、トラだった。

「ぶっ、はっはっはっ！」

「あは、あっはっはっはっ！」

体を張ったギャグに二人揃って笑い、無情の宣告を受ける。

「翠、沙和、アウト」

この宣告は部屋に残っている三人にも伝わり、何があったのかと気になる。

一方の笑った二人は、それぞれ春蘭と恋にハリセンを浴び、やられたと呟きながら厠に入った。

しばらくして二人が部屋に戻ると、何やら銅鑼が鳴り響いた。

「何？ 何事？」

「お前達、緊急出動だ」

扉を開けて入って来た一刀が、緊急出動を告げる。

何があったのかと、ゾロゾロ部屋を出て中庭に出る。

すると食糧倉庫の前で、鈴々と猪々子が喧嘩をしていた。

二人の傍には、先ほど思春が引き摺っていた、食用肉と書かれた南蛮勢がいる。

まずはその南蛮勢の姿に桃香が笑うが、すぐに御仕置きは決行されない。

騒動が終わるまで、どうぞお楽しみください状態に入っている。

「この肉は鈴々の物なのだぁ！」

「いや、アタイのだぁ！」

肉を争って喧嘩をする二人。

あまりの迫力に、周囲に集まっている兵士や文官達も手を出せない。自分達が手を出していいのかと、五人が迷っている時だった。

『待てい！』

どこからともなく聞こえる声。

その場にいる全員が周囲を見渡し、やがて屋根の上で止まる。

日を背中に浴びているので、影で姿はよく見えないが、どうやら二人組のようだ。

全員が屋根を見上げる中、その二人組みは屋根から飛び降りた。

『とお！』

そして戦隊ヒーローのように宙返りを決め、遂に姿を現した。

登場は格好良いが、二人組みの衣服は格好悪いを通り越していた。

「あははははっ！」

「ちよっ、あ、あんなの反則なお！ きゃはははっ！！」

「こんなの、ひいひい、耐えられないです！」

「腹筋、腹筋があつ！」

「笑うなっていうのが、あはは！　む、無理だつてえ！！」

姿を現した二人の姿に、突如笑い出した五人。

この二人がどんな姿かというと。

頭にはそれぞれ、青いSと赤いNのヘルメットを。

青い方は手にS極の馬鹿でかいマグネット、赤い方は同じくN極のマグネットを。

極めつけは二人の服装が、紐ビキニー丁。

さらにとどめとばかりに、その二人というのが貂蟬と卑弥呼だった。

「この世の悪を吸い寄せる」

「正義の磁力で吸い寄せる」

『あたし達放課後・電磁波・漢女・倶楽部、見参！』

マグネットをくっ付け、その間に顔を入れて笑う姿に五人の笑いは止まらない。

周囲の兵士や文官役の人達も、笑いや吐き気を頑張つて抑えている。

「うわ、変態が現れたのだ」

「変態ではない。変態という名の漢女じゃ」

「普通の変態とどう違うんだよ」

「私達がいる限り、この城での争いは許さないわよお」

猪々子の質問をスルーして喋る貂蟬と卑弥呼。

今の二人は、完全に正義の味方気取りだ。

外見はともかく実力は超一級品なので、少なくとも負ける事はないだろう。

するとそこへ、さらなる正義の味方が現れる。

「あいや待たれい！」

掛け声と共に、二人とは別の屋根の上から一人の人物が飛び降りた。見事に着地したその人物は、ポーズを決めて台詞を言い放つ。

「洛陽の平和を守る、可憐なる蝶の舞。我が名は正義の使者、華蝶仮面！」

なんとここで、華蝶仮面こと星まで参戦。

さすがに笑いは起きないが、問題はこの後の展開だった。

二つの正義のヒーローが会った、その先に待つのは。夢の強力タッグの結成である。

「手を貸そうぞ、放課後電磁波漢女倶楽部とやら」

「ふむ、華蝶仮面か。お主の噂はよく聞いておるぞ」

「いいじゃない。私達で夢の競演よお！」

あっという間に意気投合して、三人でポーズを決める。

今ここに、放課後電磁波漢女倶楽部VS華蝶仮面が実現した。

これにはさすがに五人いっせいに笑い、同時に宣告がなされた。

「全員、アウト」

三人がポーズを決めたまま、劇は止まり五人に御仕置きが決行される。

その間に戦闘が始まり、周囲が煽っている間に五人は引き上げさせられた。

「死ぬかと、思ったの」

「さすがにやり過ぎだろ……」

「あれがVSシリーズか……」

ちょっと嫌なVSシリーズだが、笑いを取れたので良しとしよう。
主旨さえ間違っていないければ、それで良いのだ。

しばしの休息を挟み、再び一刀が部屋にやってくる。

今度は午後の仕事だそうで、五人は揃って城門前に連れて行かれた。
そこには風が待っており、到着すると命令を下した。

「お前達にはこれより、一刀様案内の下で警邏をしてもらう」

「警邏……なの？」

「道筋は一刀様に伝えてある。では、後を頼みます」

「分かった」

伝える事を伝えると、風も警邏に行く設定なのか街に向かう。

「さあ、俺達も出発するぞ」

今度は外かと肩を落としながら、五人は一刀の後に続く。

勿論、この警邏の最中は民の方々にも協力をしてもらっている。
行動範囲の外側には札を出し、しっかりと注意を促した上で。

「しっかり見回れよ。困っている人がいたら、ちゃんと声を掛けるんだぞ」

指導を受けながら、前後左右をくまなく見て回る。
すると明命が、路地裏で泣いている少女を見つけた。

「あの、どうかしたんですか？」

「ぐすつ。お友達とはぐれたの」

泣き顔を見せているのは璃々。

演技と分かっていても、本当に泣いているようにしか見えない。
まだ幼いとはいえ、たいした演技力だ。

「ほら、早くその子の友達を見つけてあげよう?」

一刀に促されて璃々の手を握り、友達を探し始める。

「そういえば、お友達のお名前はなんていうの?」

「えつとね、ガチ。ピンとム。ク」

「。チャピン?。ック?」

聞き慣れない名前に首を傾げながらも、友達の名前を呼んで街中を歩く。

しばらく歩いていると、後ろから璃々を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おおい、璃々。こっちなのじゃ!」

「やっと見つけたのですぞ」

聞こえて来た声の主は美羽とねね。

あの二人なら、友達役にぴったりだなと思いつつ、全員で後ろを振り向く。

そして二人の格好に、爆笑の嵐が起きた。

「あつはつはつはつ、な、なにあれえ!」

「反則、反則なお!」

「だ、駄目だ。もう腹筋が、限界……だ」

「割れる、腹筋が割れちゃう!」

「ひい、ひい。息が、息ができません」

五人が苦しむ理由となった、美羽とねねの格好。
今の二人は、ガチ。ピンとム。ク役だ。

ただし、普通に着ぐるみを着ている訳ではない。
汚れてもいい服を着込み、その上に緑や赤の色を塗りたくっている。
所謂、リアル。チャピンとリアル。ツクによるリアルポンキ。キ状
態というわけだ。

小道具の目玉などもしっかり付け、手を振りながらこっちに近づいて来る。

「ああ、やっと見つけたあ」

再会した三人が笑っている間に、五人は御仕置きを受ける。
見事に引っ掛かってしまったと尻を撫でていると、璃々がお礼を言う。

「ありがとお、お姉ちゃん」

「助かったのじゃ」

「なのです」

璃々はともかく、他の二人の姿は目視してられない。
視線を泳がせて辛うじて耐えながら、握手を交わす。

「じゃーねー」

手を振りながら去って行く三人を見送り、耐え切った腹筋に手を添えて呼吸を整える。

さすがにガチ。ピンとム。クは知らずとも、あの格好は強烈だった。
寧ろ、一度も笑わない人がいたら見てみたい。

何も無い処で笑ってなるかと踏ん張る五人は、食べ物屋が多く並ぶ
地区に入った。

包丁などを使う店が多いので、この界隈には鍛冶屋も点在している。あっちこっちから炒め物や揚げ物の調理音、鍛冶屋が刃物を鍛える音が聞こえる。

「ここらは刃物が多い分、酔った客が殺傷沙汰を起こさないように気をつけるように」

「なるほど、それで詰め所が中心にあるんだね」

どこで何が起きてもいいように、この界隈の詰め所は店並びの中心辺りに建っている。

人数も多く配置し、素早く対処できるようにした。

「警邏の重要度も高くしているから、そうそう事件は起きてな」

「大変だ！ 向こうで喧嘩だ、互いに刃物持っているぞ！！」

「起きちゃったじゃないか、どうしてくれるんだ！」

文句を言いながら現場に向かう一刀に、そんな無茶なと呟く。

ともかく後を追うと、人だかりの中心で二人の人物が睨み合っていた。

その二人というのが、なんと麗羽と華琳だった。

「華琳様！？」

「一体何が……」

目の前の状況を理解しきれずにいると、二人の口論が聞こえてきた。

「今日という今日は許しませんわ。私そっくりのそのくるくる、叩つ切って差し上げますわ」

「それはこっちの台詞よ。この絶であなたのくるくる、切り落とすてやるわ」

理由は不明だが、どちらも互いのくるくる髪を切り落とそうとしているのは分かった。

なんとも華琳らしくない喧嘩の様子だが、演技とはいえ刃物を持っている。

このままじゃ民が危ないと言う一刀は、すかさず五人の内の一人に指示を出す。

「よし、季衣。君が止めてくるんだ」

「え、えっ！？ 僕がですか？」

一応上司が騒動の元なので、季衣が行くのは間違っていない。主人を宥めるのもまた、部下の役目だ。

「あ、あの、華琳様。皆の前なので、もう少し落ち着いて」

「あら季衣、いいところに来たわね。加勢なさい！」

「えええっ！？ か、加勢しろって言われても」

何故止めに入って、加勢しなければならないのか。

右往左往する季衣に、見守る仲間達は何もできない。

だが、ここで麗羽が先に動いた。

「華琳さん、加勢だなんてズルイですわ！ ならばこっちも、お前達！！」

『はっ！』

麗羽が指を鳴らすと、どこからともなく猪々子と斗詩が現れる。そして三人揃って「変」と書かれた札を取り出し、高く掲げる。すると「変」のモチカラが輝き、辺りを光で照らす。やがて光が収まったその先には。

「おっほっほっほっ、猪々子さん、斗詩さん、いきますわよ」

「あらほらさっさー」

「……はい」

ノリノリな麗羽はドロ。ジヨ、猪々子はボヤ。キー、恥ずかしそうな斗詩はトン。ラーな格好になっていた。

「ぶっはっはっはっ！」

「な、なにあの格好、きゃはははっ！」

「お、お猫、様。どうか、この、笑いを止めて……」

五人はこれがどういうものかは知らないが、その格好に笑っている。勿論、御仕置きはしっかり受けてもらう。さらにここで。

「待てい！」

またも聞こえた声に、後ろにある店の屋根を見上げる。そこには仮面を付けた二人組がいた。

「はっはっはっはっはっ、はあっはっはっはっはっ！」

「何者ですよ！」

「この世に正義がある限り！」

「……悪の栄えのためしはない」

この口上を言うのは、多くの正義の味方の中でもアレしかない。屋根の上にいる二人はポーズを決め、名乗りを上げる。

「ヤ。ターマン一号！」

「……同じく二号」

歯が光った一号は、笑い声とノリノリな様子からして春蘭。隣で肩を落としているのは、秋蘭だと思われる。それぞれけん玉とステッキを持ち、華琳の前に飛び降りる。

「こいつらは私達の敵、悪いが手を引いてもらおう」

「そうはいかないわ。そいつらは、私が倒すのよ」

「ならばいつそ、我々が組めばいいのでは？」

半ば棒読みのように秋蘭が台詞を言い、それはいいと春蘭と華琳も頷いた。

「じゃあ季衣、帰っていいわよ」

「えええっ！ 僕の立場は……」

がつくりと項垂れる季衣がとぼとぼ戻ってくる。

彼らが来たのなら大丈夫だろうと、一刀は引き上げを命じる。

こんなに正義の味方がいるのなら、警邏必要ないんじゃないかと思ってきた五人だった。

その後方では三対三のバトルが展開されていた。

「平和なんだか、平和じゃないんだか。よく分からない設定だな」

翠の呟いた一言に頷き、次の場所へと連れて行かれる。

しばらく歩いた先に、大きなステージを設営している広場があった。

「そうそう、今夜はここで数え役満姉妹の公演がある。お前達は最前列の警備をもらうから、そのつもりでいろよ」

また最前列かと、大きな溜め息を漏らす。

問題はその最前列で、いったい何を見せられるのか。まだまだ尻を叩かれそんな予感を残しつつ、警邏は続いていくのだった。

「やつぱり、変な替え歌かな？」

「でもそんな歌を、天和ちゃん達が歌うかな？」

「歌わないと思うよ？ 兄ちゃんが言うところの、ぷる根性、だっけ。そういうの強いから」

何が起きるのかを考えながら警邏をしていると、横から誰かが声をかけてきた。

「すまない、ちょっと道を尋ねたいのだが」

「数え役満姉妹のすてえじの場所なのじゃが」

聞き覚えのある声の主は桔梗と祭。

今度は何を仕掛けたのかと振り向けば、二人は数え役満姉妹の、ライプ衣装に似た服を着ていた。

「ぶうっ、うううっ」

（耐える耐える耐える！）

（笑っちゃ駄目だ、笑っちゃ駄目だ、笑っちゃ駄目だ！）

五人が必死に抵抗している間に、桔梗と祭は一刀に道を教わって行ってしまった。

どうにか耐えた五人は、笑っていたらどうなっただろうと気になる。ゲーム中の今はともかく、後で個人的におしおきを喰らいそうだ。真桜や焰耶のように、最近流行っているテルテル坊主の刑を。

「ていうか、あの二人も年齢を考え、ろおおおおっ!？」

翠が言っではならない一言を言おうとした瞬間、どこからか矢が飛んできて足元に刺さった。

どうやらあの後、路地裏に引っ込んだ二人のどちらかが、ゲームの妨害にならない範囲で矢を射ったのだろう。

「こら、余計な事はしないように」

「分かっておるわ」

声から判断するに、今のは桔梗の一撃だった様子。

おとなしく引き上げたようなので、ひとまずは安心だろう。

だが、笑いを誘う罠はまだ終わっていない。

彼女達に、休息という二文字はまだまだ訪れない。

恋姫の使いやあらへんで p a r t 3 【外史】（後書き）

混沌としてきた笑いの罫。
次なる一手は果たして。

恋姫の使いやあらへんで part 4【外史】

一言で片付けるならば、疲労困憊。

笑うというのは思ったより体力を使うが、それを堪えるのも体力を使う。

故に五人ともぐったりとしている。

机に身を預ける者、背もたれに寄り掛かったまま天井を見上げる者、予備の椅子をくっ付けて並べ、即席の寢床を作って寝転がる者。

様々な状態を見せているが、まだ全てが終わった訳ではない。

だいぶ日も暮れて、間もなく夜に入ろうという時だった。

「おい皆、そろそろ数え役満姉妹の公演が始まるから、警備に行くぞ」

遂にこの時間が来たかと、五人が思い腰を上げる。

警邏で通った道を歩いて会場に行き、割り当てられた最前列の警備に就く。

「それじゃあ、ちゃんと見張るんだぞ」

『はい』

一人一人の肩に手を当てて、見張るように伝えと一刀はどこかに行ってしまふ。

しばらくすると会場の入り口が開いたのか、観客が続々と雪崩れ込んでくる。

これから何が起きるのかと、しっかり縄を張って次なる笑いのネタを待つ。

すると、公演開始時間が迫ったのか、司会役の一刀がステージの上に現れた。

「皆さん、間もなく公演開始です。なお、今回は前座を用意しました。公演開始までの僅かな時間ですが、どうぞ楽しんでください」

こういった場の前座の役割は、本番前に会場を沸かして盛り上げる事にある。

どんな前座を用意したのかと五人も注目する中、会場に何故か目覚まし時計の鳴る音が響き渡る。

開演の合図とも違うこの音の正体は、前座の登場の音だった。

「何、何？」

「何が始まるの？」

不安と期待が入り混じる中、ステージに小さな爆発が起きて煙幕が舞う。

その中から姿を現したのは。

「帰って来た！」

『リアルポンキッ。！』

『始まるよお！！』

再度現れた、オチビトリオによるリアルポンキ。キに五人とも大爆笑。

テンポの良い音に乗って子供らしく踊る姿は、一見すれば可愛らしい。

だが、あの格好が全てを笑いに導いていた。

リアルガチ。ピンとリアルム。クの格好で踊られては、滑稽以外の何物でもない。

「ぶっはっはっはっ！ ああっはっはっはっはっ！！」

「死ぬ、笑い死にするのお！」

「お腹が、お腹が痛いよ。あっはっはっはっ！」

やがて踊りが終わって三人が退場すると、アウト宣告が会場に響く。御仕置き隊が颯爽と登場して、五人の尻を叩くとさっさと帰って行く。

「皆さん、長らくお待たせしました。これより、数え役満姉妹の入場です！」

一刀の入場宣言と共に観客が盛り上がる。

あまりの勢いに五人とも驚き、縄は大丈夫かと心配になる。そんな中、ステージに煙幕が吹き出て三姉妹が姿を現す。

『皆、お待たせえ！』

『ほあああああつ！』

三姉妹の登場と同時に会場は大盛り上がりになる。警備といえども、タダで公演を見られるのはついている。そう思ったのも束の間、笑いの罫は次々に発動する。

「みんな大好き」

『てえんほおちゃあああん！』

「みんなの妹」

『ちいほおちゃあああん！』

「とつてもかわいい」

『れえんほおちゃあああん！』

いつもの口上に合わせて観客が三姉妹の名前を呼び、ボルテージは更に加速する。

このまま歌に移るのかと思いきや。

「今日は皆に、紹介したい人がいるのぉ！」

「地和達の、とおっても大事な人だよぉ！」

紹介したい人と聞かされ、誰だろうかと思ひ浮かべる。

まさか自分達の旦那様だとか言つて、一刀を紹介するつもりか。

それで暴動を起こして笑わせる、五人はそう判断した。

しかし心構えさえしておけば、そうそう笑うはずがないと油断してしまつた。

「それじゃあ、皆で一緒に呼んでね」

『せえの、お母さぁん！』

お母さん？

五人の耳に想定外の言葉が飛び込み、目の前のステージに煙幕が立ち込める。

そこから姿を現したのは。

『皆、こんばんわぁ！』

『ぶはっ、はっはっはっ！！』

登場した人物を見るやいなや、五人は揃つて大爆笑する。
その登場した、母親という人物は。

「天和ちゃんのお母さん！」

『こおうちゅうさまあああつ！』

「地和の母親！」

『げえんがぁんさまあああつ！』

「人和の母者！」

『こおうがいさまあああつ！』

三姉妹と同じような衣装を着ている、紫苑、桔梗、祭のお姉様方三人だった。

勿論、この会場にいる人は全員、本当の母親でないことは分かっている。

彼らはあくまで、五人を笑わせるのに協力しつつ、見事に三姉妹のライブチケットを手にした幸運な者達だ。

「あつはつはつはつ！　そ、そりゃねえだろ、おい！！」

「こんなの、思いつく方が可笑しいってえ！」

「あははははつ！　あ、顎が外れそう！！」

大笑いする五人もそうだが、会場に来ている客役の人々も笑いを会場の盛り上がりで誤魔化している。

「それじゃあ皆。お母さん達と一緒に一曲目、いくよお！」

『ほあああああつ！』

この調子で歌が始まるかと思いきや、そうは問屋が卸さない。警備役の兵士が何かに気付き、ざわめきながらステージの下に集まっていく。

ステージの上にいる六人も、何事かと困惑している。

だが、一つ忘れていた事がある。

それは。

「そこにいる黄忠！　お主は年齢詐称罪で指名手配されている。大人しく縛につけ！！」

「ぶうつ！！」

始まったばかりの頃に見た、本部入り口に貼ってあった手配書。その中に紫苑の手配書があったのを思い出し、納まってきた笑いが再発する。

「くっ、そうはいかないわ。娘の大事な晴れ舞台でだけは、捕まる訳にはいけませんから。天和、今日はちよつと無理して出てきたけど、これからも頑張つてね。お母さん、影ながら応援しているわ」

確保に向かう兵士を睨み、急いでその場を後にする紫苑。別れ際に天和に笑顔を見せ、ステージの裏に消えて行った。

「追え、逃がすな！」

バタバタと走っていく兵士を見ながら、膝を着いた天和が叫んだ。

「おかあさああああん！」

まるで親と引き離されたように、紫苑の行った先に手を伸ばす。迫真の演技は、まさにプロ根性ともいえよう。普段の天然な感じとは大違いだ。

「全員、アウト」

ともかく、寸劇は終わったのでアウトの宣告が行なわれる。

ゆらりと立ち上がった五人は尻を御仕置き隊に向け、おとなしくハリセンで叩かれる。

叩いた瞬間に良い音が会場に響き渡り、御仕置き隊はそそくさと退散する。

「うう、完全にしてやられたぜ」

「もう考えるのはよそう。軍師じゃないのに、考えても無駄だよ」
「それ、国王の桃香さんが言ったら駄目な気がするんですけど……」

明命の指摘は聞き流し、視線は舞台に戻る。

膝を着いて泣いている天和は、演技には見えないほど本気で泣いているように見える。

「姉さん……」

「ええ、皆さん。ちょっと問題が発生したようなので、本日の公演は中止します。なお、整理券はお持ちください。入場券の代金の払い戻しに」

慌てて一刀が観客への説明をする中、天和に肩を貸してステージ上の五人が裏に下がる。

ざわめく会場を宥め、そろそろ観客を帰そうとした時だった。

舞台脇から真桜が現れて、一刀に何やら耳打ちをする。

やがて一刀の表情が驚いたものになり、閉演の挨拶は緊急連絡に変わる。

「ええ、ご来場の皆さん。ちょっと聞いてください、重大な事件が起きました」

真桜と一刀の慌しい様子から、何かしら問題が起きたようだ。

観客や警備の兵もざわめき、何事かと騒ぎ出す。

「落ち着いてください。実はこの会場内に、泥棒がいる可能性が高いのです」

一刀の告げた内容に、会場がどよめきに包まれる。

説明によると、三姉妹の控え室から天和の舞台用リボン、地和の舞

台用髪飾り、人和の予備の眼鏡が盗まれたそうだ。

しかし、三姉妹が控え室を出た時間から今まで、会場から外に出た者は一人も報告されていない。

となると、内部に犯人がいる可能性が高い。

「観客の皆さんは、出口で持ち物と身体検査を。警備兵の皆は、俺の処まで集まってくれ」

ざわめく観客は風や秋蘭、その部下が検査し、警備兵は順番に一刀と真桜が検査する。

心配になったのか、張三姉妹が一刀の後ろに現れて犯人がいなかったと厳しい視線を送る。

そしてとうとう、桃香達五人の番になった。

さすがに一刀が検査する訳にはいけないので、真桜が確認する。

「あつたでえ、天和の舞台用リボンやあ！」

「ええええっ!？」

何故か明命の懷から、天和のリボンが出てきた。

それを聞いた一刀は明命の肩に手を置き、リボンを手に天和の前に連れて行く。

「明命、ちゃんと謝って返すなら、頬への平手打ち一発で許してくれるそうぞ？」

「濡れ衣です、冤罪です、何者かが私を陥れようとしているんです
うううっ！」

処刑台に向かう罪人のように、地和と人和に天和の前に連れて行かれる。

軽快なフォームで平手打ちの練習をしている。

ちなみに、何故明命の懷から天和のリボンが出てきたのかというと、先ほど一刀にちゃんと警備をするよう、肩を叩かれた際に修理を終えた小型状態の馬折神が潜ませたのだ。

「さっ、早くリボンを返して謝りなさい」

「あううう。ご、ごめんなさいです」

秋蘭と凧まで現れ、もう逃げられないと悟った。

仕方なくリボンを差し出して謝ると、リボンを取り返した天和から平手打ちが飛んでくる。

それはもう、綺麗なフォームで見事に体重の乗った一撃が。

力任せに叩く春蘭のような一撃とは違い、技で放たれたこの一撃で明命の頬に赤い跡がついた。

「うん、行って良し」

一刀に許しをもらい、頬を押さえて下がる明命。だが、まだ全てが終わったわけではない。

「一刀様、見つけました！ 地和の舞台用髪飾りです!!」

「こっちもだ。人和の予備の眼鏡が見つかった」

残りの四人の身体検査をしていた凧と秋蘭が、証拠の品と犯人を手にとってくる。

今度の犯人も、明命同様に肩を叩かれた際に物品を持たされてしまった。

その犯人はというと。

「違っって、あたしはやってないって!」

「無罪なの、誤認逮捕なの、孔明の罠なのぉ！」

必死に無罪を呼びかける翠と沙和。

ズルズルと引き摺られて来て、周囲に睨まれて仕方なく謝罪と盗んだ品を返す。

そして頬に平手打ちを喰らう。

翠は地和から、沙和は人和から頬に一発ずつ。

その様子に、思わず苦笑いを浮かべた桃香と季衣だが。

「桃香、季衣、アウト」

「ええええっ!？」

「苦笑いも駄目な、アッー！」

あつという間に尻を叩かれ、五人はそれぞれ頬や尻を押さえて会場を後にする。

城の控え室で提供された弁当を夕食に食べるが、テンションは高くない。

「お茶……淹れますね」

「お願い」

五人は今更になって気づき始めていた。

この企画は見ている側からすれば楽しい催しだが、こうして参加者になれば地獄だと。

確かに笑いの罠は面白いし、楽しめる。

しかし、時間が経つにつれて体力と気力を大きく削っていく。

楽しいどころか、どんどんやる気も何も奪っていく。

「はぁ……ん？」

溜め息を吐いた桃香の目に、ある物が留まる。
それをお茶と一緒にお盆に乗せて、皆の前に持ってくる。

「ねえ、これ何かな？」

机の上に置かれたのは、絶対に押すなと書かれた二つのボタン。
どちらも一刀が「押」のモチカラで作った、笑ってはいけないシリ
ーズお馴染みのボタンだ。
そんな事とは露知らず、押してみれば分かるじゃん、季衣がボタ
ンの一つを押す。

「季衣、アウト。峰打ち」

「えええっ！ って、峰打ち！？」

まさかの御仕置き変更に、表情が強張る。

御仕置き隊から恋と春蘭がやってきて、季衣を押さえつける。

混乱する季衣の後ろに立つのは、刃を返したシンケンマルを構えた
一刀。

「に、兄ちゃん？」

不安な顔をする季衣に微笑んで返し、シンケンマルは振り抜かれた。

「いったあああっ！」

見事にシンケンマルの峰が叩き込まれ、一刀達三人は早足で去って
いく。

部屋に残ったのは、痛さのあまりに座り込む季衣と呆然としている
桃香達。

「これってさ、押した人にあれがあるの？」

「じゃあ……試してみる？」

試してみたい気持ちはあるが、もしも本当なら自分に災難が降り注ぐ。

誰も押さないその中で、痺れを切らした翠が名乗りを上げる。

「ええい！ 誰も押さないなら、あたしが押す！！」

男気溢れる言葉遣いの翠が腕を捲り、ボタンを押す。
結果は。

「季衣、アウト。峰打ち」

「そんなあああつ！ いや、やめて春蘭様、ねえ、本気で痛いから兄ちゃんも手加減……アッー！！」

悲鳴を響かせながら叩かれた季衣は撃沈し、ぐったりと床に倒れた。

「ああ、その……すまん」

思わず謝る翠だが、季衣はそれどころではない。

涙目で尻を押さえて蹲っている。

「これ、片付けた方がいいの」

「そうですね。じゃあ沙和さん、部屋の隅っこに置いておいてください」

「分かったの、あつ！」

ボタンを取りに行こうとするが、床のへこみに足を引っ掛けてしまう。

咄嗟に机に右手を伸ばして転ばずにはすんだものの、ここで大きな問題が起きた。

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないの……」

「えっ？」

「これ、押しちゃったの」

沙和が伸ばした机の上には、もう一つのボタンが置かれている。どうやら手を伸ばした表紙に、それを押ししてしまったようだ。全員の顔が青くなり、放送を待つ。

そして何度も聞いた音と共に告げられたのは。

「翠、アウト。峰打ち」

「なに！？」

アウト宣告に御仕置き隊と一刀が現れる。

如何に翠であろうと、恋と春蘭に抑えられては逃げられない。

「やめろ、手加減、手加減を頼……だあああっ！」

いい音を響かせて尻を叩かれ、撃沈する。

また被害が出たと、明命がボタンの方を向くと、起き上がった季衣がボタンを両方とも手にしていた。

恨みがましい視線を翠に送り、指先をボタンに近づける。

「ちよつ、待つ！」

「さっきのお返しだい！」

そう言ってボタンを押すと、先ほどの光景が繰り返される。

「翠、アウト。峰打ち」

「あああああつ!？」

無常な宣告と御仕置き隊、一刀の登場。

尻を叩く音と翠の悲鳴、御仕置き隊が引き上げる足音が順序よく聞こえる。

仕返しを終えた季衣は、翠を軽く睨んでボタンを部屋の隅っこに片付けた。

「うう……ケツが痛え」

「僕もだよ」

「まあまあ、落ち着いて。ね？」

険悪な雰囲気 of 二人を桃香が宥める。

しかし、五人はもう色々と限界に近かった。

もう何も起きるなど、五人全員が願った。

それからしばらくは何も起きなかったが、夜が更けると扉が開いて一刀が現れる。

「これから順番に夜の見回りに行って貰う。なお、見回り中は笑っても良しとする」

まさかの救済措置に五人の表情が明るくなる。

しかし、そうは問屋が卸さない。

「なにせ見回り中は、怖がつてはいけない洛陽だからな。あつ、怖がつても御仕置きは無いよ」

五人の地獄はまだ終わらない。

恋姫の使いやあらへんで p a r t 4 【外史】 (後書き)

一時怖がつてはいけないに移行する洛陽の一日。
今宵、女性の悲鳴が城内に響き渡る。

恋姫の使いやあらへんで part 5【外史】

夜の見回りに出るにあたり、何故か笑ってはいけなから怖がってはいけなに移行された。

主旨が変わった事も気になるが、どんな罠が待ち構えているか予想が付かない。

真つ暗な廊下を見回る第一陣は、季衣と桃香と明命の三人。

翠と沙和は控え室で待機し、三人が戻ってきたら別の巡回ルートで見回りに出る。

「どんな仕掛けが待っているんだろうね？」

「そういえばこの城って、前に幽霊騒動があったような」

「えええっ！ ほ、本当に！？」

勿論、騒動があったのは本当である。

以前に月が一刀の部屋を夜伽に訪れていた時、そんな騒ぎがあった。本人達も言い出せず、結局のところ華雄と恋と霞が解決したのだ。

「なんだ、もう解決しているんだ」

「よかったあ。本当に出るのかと想ったよお」

ほつとした季衣と桃香が胸を撫で下ろしている間に、明命が現在地を確認する。

「えっと、ここの厨房がそこなので、次を右ですね」

手元の明かりで地図を灯しながら角を曲がる。

すると、どこからともなく泣き声が聞こえて来た。

「くすん……くすん……」

誰もいないはずの廊下に泣き声とあって、三人に緊張が走る。
ひよっとしたら誰かいるのかと、灯りを高い位置に掲げて進んでみる。

先頭を明命が歩き、その後ろに隠れるように桃香、更にその背中に季衣が隠れて続く。

「だ、誰かいるの？」

「いました、あそこに」

『ひいっ！』

暗闇の中に蹲っている後ろ姿に季衣と桃香が驚く。

隠密出身の明命は平静を保って歩み寄り、灯りで誰なのかを確かめる。

「あなたは……流琉さん？」

「えっ？ 流琉？」

知り合いと分かると恐怖心は薄れ、平気な顔をして近寄っていく。

「うう……くすん」

「ねえ流琉ちゃん、どうかしたの？」

「大事な物を、失くしちゃったんです」

蹲って泣きながら、大事な物を失くしたと言っている流琉。
ひよっとしてそれを探しに行つて、怖い目に合わせるのかと三人揃って考える。

「探してあげた方がいいのかなあ？」

「でもでも、怖い仕掛けが待っているんですよ？」

「僕は探してあげたいな。演技とはいえ、流琉が困っているのを見過ごせないから」

なんと友達思いの季衣の発言に、断ろうとしていた二人が罪悪感に包まれる。

「そうだよ、罠と分かっているけど立ち向かわなくちゃ」

「そうです！ 私達が怖がらなければいいんですから！！」

時には罠と分かっているけど、立ち向かわなければならぬ時がある。それを改めて知った三人は、未だに蹲っている流琉に声を掛ける。

「私達が探してあげるよ。その失くした物」

「ぐすつ……本当に？」

「勿論です！」

「だからさ、何を失くしたのか教えてよ、流琉」

笑顔で尋ねてくる三人だが、彼女達はこの罠の真意にまだ気付いていない。

泣き声の治まった流琉が、再度問い掛ける。

本当に、と。

「うん。それで、何を失くしちゃったの？」

「あのね……私の顔」

ようやく向けた顔には、目も鼻も口も無い。

所謂のつべらぼうな状態になっていた。

灯りを近づけたせいで、それが三人の目にもはっきり映り、数秒間だが時間と空間が凍りついた。

そしてフリーズが解けると。

『きゃあああああつ!!』

仲良く悲鳴を上げて走り去ってしまった。

三人はそのまま見回り順路を回らず、悲鳴を上げたまま控え室へと走る。

ちょうどその頃、控え室に残っている翠と沙和は、モチカラで作ってもらったオセロをやっていた。

そこへ聞こえてくる三人の悲鳴。

しかも最初は遠くのために微かだったのが、段々と大きくなって近づいて来る。

『ああああああつ!!』

「ななな、なんだあ!？」

「どうしたの？ 何があつたの!？」

悲鳴を上げながら飛び込んできた三人に何があつたのか尋ねようとするものの、生憎と息を整えるので精一杯。

ぜいぜいと息を切らしながら、混乱したまま先ほどの事を告げようとする。

「るるる、流琉のかかか、顔、顔が、なななく、なくなっ」

「落ち着け！ ほら、深呼吸しろって!!」

「ははは、はひ。すう、はあああああああつ……ゴホッ、ゴホッ！」

「ちよっ、吸う量に対して吐く量がずっと多いのお！」

咳き込む明命の様子から、何が凄い事が起きたのだと翠と沙和は理解した。

そこへ一刀が現れて、事情を聞かせぬまま二人を出発させる。半ば強制的に。

「まったく、何があったのか聞いてからでもいいだろう」

「そうなの。どうせ沙和とは違う道なんだし、同じ仕掛けがあるとは思えないの」

広げた順路図の道順は、確かに桃香達とは違う道順。

教えてもらっても平気なはずなのに、何故かそれを許さなかった。

「つまり、あいつらと同じ仕掛けがあると考えていいな」

鋭い翠の考えに沙和も頷いて同意する。

だがそうになると、逆にどんな仕掛けなのが気になってくる。

色々と考えながら歩いて、厠の前を通過しようとした時だった。

「あら、沙和に翠じゃない。どうしたの、こんな時間に。見回り？」

厠の中から華琳が出てきた。

まさかここで華琳が出るとは思わなかった二人は、驚き一瞬身構える。

「か、華琳様」

「驚かすなよ。誰かと思ったじゃないか」

「うふふ、悪かったわね。じゃあ私は寢所に戻」

喋っている最中に軽く横を向いた華琳。

すると、頭が揺れて首から下が床に落ちた。

「ひiiiiiiiっ！」

「きゃああああっ!？」

目の前の出来事に悲鳴を上げる二人。
しかし、まだ仕掛けは終わっていない。
落ちた生首がクスリと笑って。

「あらやだ、頭が落ちちゃった」

と喋ったのだ。

しかも体部分がそれを拾い上げようとしている。

「のああああああっ!」

「いやああああああっ!」

あまりにホラーな光景に、絶叫して走り去る二人。

先の三人のように来た道を戻るのはなく、真っ直ぐ前に向かって
全力で走り続けた二人の脚が止まったのは、玉座の前の辺り。

「はあ、はあ。驚いたの」

「ぜえ、ぜえ。あんなのありかよ」

座り込んで息を整えていると、今度はどこからともなく足音が聞こえてくる。

しかも普通の足音ではなく、水に濡れた足で歩くような足音が。
それと一緒に、何かを引き摺る音まで。

「ここに、今度は何だ？」

左右をキョロキョロと何度も見ながら警戒していると、その音の発生源が近づいてきた。

方向は、二人が走ってきたのとは逆の方向。
鬼が出るか蛇が出るか。

固唾を飲んで身構える二人の前に現れたのは。

「あつ、翠さんに沙和さん。こんばんは」

につこりと笑う月だった。

「なんだ、月か……てっ！」

「あわわわわっ」

月明かりと灯火に照らされる月の姿は、返り血で血まみれだった。
水色の寝巻きを真つ赤に染めて、裸足の足に付いた血のせいで真つ赤な足跡が続いている。

そして何より、両手に持っている物が恐ろしかった。

右手には血の付着した鉈。

左手は同じく血まみれの雪蓮を引き摺っていた。

「うふふ。まさかお二人も一刀さんの寢所に行くんですかあ？ 駄目ですよ、一刀さんは私のものなんです。愛人なんかに奪われてたまるものですか。あは、あははははっ」

壊れたような笑い声を上げているのは、いつも可愛らしい月のはずなのに。

それなのに今は恐ろしい。

この恐ろしさなら、武の達人の雪蓮に勝っても不思議じゃなく思える。

「雪蓮さんも、愛人風情が正妻になるだなんて馬鹿な事を言わなければ、こんな事にならなかったのに。身の程を知らせたら、なんか

死んじやいましたよ」

クスリと笑って、事切れた雪蓮を二人に見せる。

だらんと力なく下がる頭と腕、そして鉈で切られたのであろう、胸元から腹部に掛けての大きな傷。

なんとも言いがたい恐怖に震える二人に、月は雪蓮を引っ込めて鉈を二人に向ける。

「お二人も一刀さんを奪う気なんですね？　なら仕方ありません。私から一刀さんを奪う罪、その命を持って償ってもらいます！」

大きく鉈を振り上げた瞬間、歴戦の将である二人も悲鳴を上げた。

「どわあああああつ！」

「ひいひいひいっ！！」

脇目も振らずにただ全力で走り、廊下を駆け抜けていく。

気がついたら控え室の扉を勢いよく開けて、座り込んで震えていた。

「ど、どうしたの二人共」

「さっきの悲鳴も凄かったですけど、そんなに怖い事が！？」

「またのっぺらぼうが出たの？」

『そんなのより、もつと恐ろしい物を見た！』

声を揃えて叫ぶ二人に何があったのか、それは当事者のみが知るところである。

首を傾げる三人を余所に、部屋にいた一刀が連絡事項を告げる。

「はい、翠と沙和が戻って来たから、怖がってはいけなはここまで。ここからは笑ってはいけなに戻るから」

そうだった。

未だに震えている二人を除く面々は、また笑ってはいけなに戻った事に頭を抱える。

しかし、この先のスケジュールはもう無い。

後は隣にある仮眠室で、朝までゆっくり眠れる。

そう思って立ち直った二人を連れて、仮眠室に入った時だった。

『ぶふうっ！』

数十分振りの笑いのネタに、五人が揃って吹いてしまう。

それというのも、仮眠室に設置してある五つの寝所で、色々な事が起きているからである。

手前には、手に一刀が現代から持ってきた本を持って欲情する穂と、その穂に押し倒されている冥琳。

その隣の寝所では、絡み合う二人に稟が鼻血を流している。

真ん中では小蓮、桂花、朱里、雛里、風が貧乳党バンザイと酒を飲んでいる。

その隣には犬に好かれる方法と書かれた本を手にしつつも、セキトに舐められて涙目になっている焰耶。

一番奥には星と霞が飲みながら、一刀との夜伽話を暴露して大笑いしている。

「ちよっ、何ですかこの混沌は！」

「あはははっ！ よく分かんないけど、何故か笑っちゃうのぉー！」
「気持ちちは分かるけど……。全員、アウト」

アウト宣告で、久々に出番だと意気込む春蘭を中心に御仕置き隊が参上。

尻をハリセンで叩いて、走り去っていった。

「うう、痛みを思い出しちゃったよ」

「ほらお前ら、こいつらが寝るから早く出て行け」

一刀に促されて騒いでいた面々が、渋々ながら仮眠室から出て行く。後はもう寝るだけなのだが、そうは問屋が卸さない。

どういう訳か、寝所にある毛布が妙に膨らんでいるのだ。

桃香の寝所にある毛布を捲ると、底が抜けていて華雄が嵌っていた。次に翠の寝所の毛布を捲ると、宝慧本部長人形が数十体。

さらに季衣の寝所には、月の絵入り抱き枕を持った詠が。

明命の寝所には、一刀の学生服を着込んで萌えている蓮華が。

そして沙和の寝所には、美羽ブロマイドに囲まれた七乃がいた。

当然、五人の反応は笑い。

五連続の罨に、桃香三回、翠四回、季衣三回、明命二回、そして沙和が三回尻を叩かれた。

「だあああつ！ もう寝る！ 絶対に朝まで起こすなよ！！」

宝慧本部長人形をどかし、真っ先に横になる翠。

それに続くように残る四人も横になり、初めて本当の意味で休むことができた。

そして翌朝。

一刀に起こされた五人は、修了式をするからと玉座に連れて行かれた。

玉座には主だった将と軍師が集まり、五人を迎える。

最前列に並ぶ五人の前に都、呉、魏の王が並び、修了証書を手渡す。ただし、蓮華は昨夜のように一刀の制服を着たまま。

同じく月も、雪蓮は引き摺っていないが血まみれで鉈を持っている。

「ぶっつ」

「桃香、アウト」

「ええっ、ちよつと待って！ まだ終わって、痛っ！！」

最後の最後で油断した桃香の尻が叩かれる。

さらに修了証書を読んでいる最中で華琳が噛み、翠が撃沈したのを挟み、修了式は終わりを告げた。

「では、これにて笑ってはいけない洛陽二十四時を終了します」

『お、終わったあ』

ようやくの終了宣言に、五人がぐったりと座り込む。

各国の重鎮が代表者の下に集まり、健闘を称える。

そして、注目の結果発表が始まった。

見えないところ笑い、御仕置きを受けていることもあり、相当な回数尻を叩かれた。

注目の結果は。

桃香	216回
翠	197回
季衣	205回
沙和	188回
明命	164回

計測者：蓮華、華琳、月、朱里

「以上の結果を持って、優勝者は明命！ そして最も笑ってしまった罰ゲームを受けるのは桃香に決まりましたあ！！」

発表された結果に各所で歓声と溜め息が沸き、桃香は悲鳴を上げる。文句を付けようとした焰耶は紫苑と桔梗に捕まり、武器も取り上げられる。

そして、罰ゲームが執行された。

「それでは罰ゲーム。皆の面前で王による公開ハリセン百叩き・尻限定を開始します」

「いい、やあああああつ！」

悲鳴を上げる桃香は真桜特性拘束具に拘束され、背後にハリセンを持った四人の王が立つ。

楽しそうな魏王、華琳。

同じく楽しそうにしている、桃香の代わりに参加した元呉王、雪蓮。返り血を浴びた服装のまま、申し訳なさそうにしている都王、月。一刀の制服を着たまま、同じく申し訳なさそうにしている現呉王、蓮華。

一人当たり二十五回、合計百回の尻叩きを、各国の重鎮の前で晒す。しかも尻を皆の方に向けて。

これ以上の罰ゲームは、そうそう無いだろう。

「じゃあ、皆で数えよう！」

『おおつ！』

ここから、一から百までの長いカウントが始まった。

四十辺りからなんだか気の毒にも思えたが、これがルール。全てを終えた時、桃香の尻は真っ赤に腫れていた。

そして勝者となった明命は、晴れて現代行きの権利を得た。誰と現代に行くのか、それは当日のお楽しみだ。

こうして、一大企画は静かに幕を閉じた。

おまけ 怖がってはいけないうに参加した面々の裏側

「ぶうぶう、何で私が死体役なのよ」

「くじで負けたんだから、当然でしょう？」

幻と書かれたモチカラを受け、首が外れるような幻を見せる華琳。その隣では死体役になった雪蓮が、体に血糊を塗って作り物の傷をくっ付けている。

「兄様、これ前が見えないんですけど？」

のっぺらぼうのお面を付けた流琉。

設計の関係上、前が見えないのは仕方がない。

だが、それ以上に問題なのは月だった。

「一刀さん。この格好でいると、どこかの村落で連続怪死・失踪事件を起こせそうです」

「駄目だ月！ ひぐ。しに目覚めちゃ駄目だ！ 確かにひ。らしっぱいけど！！」

慌てて止めに入ったお陰で目覚めることは無かったが、月の目の色が変わりかけていた。

まるで瞳の色素が薄くなり、暗い世界で狂っているかのように。

「危ないところでした。一刀さん、ありがとうございます」

「いやいや、それほど、ぶおっ！」

「ねえ一刀！ 私も台詞欲しい！！」

「死体役だぞ。無茶言つなよ」

「だつてえ」

一刀に抱きついて文句を言う雪蓮。

そこに、話の邪魔をされた月が作り物の鉈を向ける。

そして強い目つきをして。

「雪蓮さん、話の邪魔をしないでくれますか？」

暗く重い、迫力のある口調。

演技でもなんでもない、それは本気の目と口調だった。

「ゆ、月？」

「はっ！ ご、ごめんなさい。つい、うっかり」

申し訳なさそうに頭を下げ、苦笑いを浮かべる姿はいつも通り。
ならば、先ほどのは何だったのか。

一刀はこれ以上、月がひぐら。の世界に目覚めさせないよう願った。

恋姫の使いやあらへんで p a r t 5 【外史】（後書き）

何はともあれ、笑ってはいけない企画は終わった。
次回は明命が、彼女を連れて現代に向かいます！

大人しい二人の賑やかな一日【現代】

笑ってはいけない洛陽に見事勝利し、無条件に現代に行く権利を得た明命。

彼女が誘った旅のお供は、やはり親友の亜莎だった。そんな二人が現代で何をしているのかというと。

「はうあああつ！ お猫様がいっぱいですう！！」

目を輝かせて柵の中に特攻して、そこにいる猫を思う存分モフる。彼女達は現在、一刀に連れられてとある広場に来ている。わんにゃんパークという、犬猫好きにとっては天国のような場所に。

「天国です、楽園です！ 正に天の国です！！」

「うん、まずは落ち着こうか」

歓喜の渦の中にいる明命を現実に戻すため、手刀を一発頭に落とす。

この一撃で正気を取り戻した明命は、照れながら両手に抱えていた猫を解放した。

頭には漫画でよく描かれるような、それは見事な瘤ができています。

「す、すみません。お猫様がたくさんいたので、つい猫好きの本能が」

「そんな本能はどこかに片付けて、冷静にいきましょうか」

「明命……」

親友の暴走する姿に、さすがの亜莎も困惑気味。買ってもらったタイヤキを抱え、苦笑いを浮かべている。

「では改めまして……お猫様あ！」

全く冷静にならず、再度突撃していく姿に少々呆れてしまう。
どこまでも果てしなく猫を求める姿は、ある意味、猫好きの鑑とも言える。

そんな後ろ姿を見つつ、一刀と亜莎は近くのベンチに座る。
亜莎の意向で大量に買い込んだタイヤキを食べるために。

「はむ、はむ。おいひいですね、このタイヤキというのは。ゴマ団子とは違って、生地がフワフワです」

「うん、分かったから。だから食べながら喋るのはよそう。行儀悪いから。ていうか、食べるの速っ!？」

十個は買ったはずのタイヤキが、既に残り六つになっている。
一つ一つ食べているはずなのに、もう四つも食べたのかと少し驚く。

「あむ、あむ。ひあわせでふう。天の国には、こんながあるなんてえ」

「はうああああ。お猫様だらけです、幸せです！ あっ、そっちの三毛猫さんもお待ちください!!」

「ああもう、そんなに慌てて食べなくていいから。それとその三毛猫、まさかホ。ムズって名前じゃないよな？」

常識外れの行動はしないだろうと踏んだ二人だが、見事に裏切ってくれた。

暴れていないだけマシなだけで、明命は猫に暴走、亜莎はタイヤキの美味さに魅了されつつあった。

このままでは触れ合いの場の猫を連れて行きかねないし、向こうにタイヤキを作る道具を持って行きそうだ。

別にタイヤキを作る道具は構わないが、猫を連れて行くのはアウトだ。

一応ここにいる猫は、野生でも売り物でもない。あくまで、触れ合うために用意された猫達なのだ。

「そこらへんは、何度も重ね重ね説明したんだけどなあ」

説明されたにも関わらず、明命はうつかり連れ出そうとして、係員に怒られていた。

「あうう。すみません、何度も言われたはずなのについ」

叱られて肩を落とし、トボトボと戻ってくる。

足取りの重い明命の周囲だけ空気が暗いのは、おそらく気のせいではない。

「まあまあ、気を取り直して。ここはタイヤキでも一つ……っでも無いのか！」

「す、すみません。あまりに美味しくて」

だとしても、十個も全部食べられるものだろうか。

よほどの甘味好きなら、食べられるだろう。

それにしても、亜莎の小さな体のどこに大量のタイヤキやゴマ団子が入るのだろうか。

これはおそらく、呉の七不思議となってもおかしくはない。

「仕方ない、別を買いに行こう。幸い、資金はたくさんあるんだ」「す、すみませえん」

半分泣きの入った亜莎を引きつれ、明命と共に少し離れた場所に並

ぶ屋台に向かう。

こういう触れ合い広場の近くには、大抵屋台が並んでいる場合が多い。

今回もそれに乗っ取り、多数の屋台が出店している。

「次は何にする?」

「タイヤキを」

「まだ食べるの!？」

さつき十個食べたばかりだというのに、まだタイヤキを要求され驚く。

気に入ったのは分かるが、これ以上は見ているだけで胸焼けを起さそうだ。

「い、いけませんか?」

「まあ、別に構わないけど。他の物を食べてみてからでもいいじゃないかな?」

もつともらしく聞こえるが、実際はこれ以上の甘い物は本能が危険と告げていた。

「そ、それもそうですね。じゃあ、あの大判焼きというのを」

「大して変わんねえええっ!」

「ひゃうっ!？」

形が変わっただけで、材料はそれほど大きく変わらない。

というより、分かっていて言っているのだろうか。

今日の一日だけで一刀のツッコミレベルが、少なくとも五は上がる気がする。

「あの、大丈夫ですか一刀様」

「はあ、はあ。天然って怖いんだな」

順調にツツコミレベルが上昇している一刀は、膝を着いて息を切らす。

大声で叫んだため、少々息切れしたようだ。

「いけませんでしたか？ 大判焼き」

「いや、悪くはないけどさ、材料はタイヤキとあまり変わらないよ？」

「そ、そうなんですか？」

「だったら、別の物にしましょう。私、あれがいいです」

明命が指差したのは、たこ焼き。

あれならば甘くは無いので、快く快諾した。

意気揚々と出来たてのを買って、いざ食べてみると。

「熱っ、熱っ、熱いです！」

「何？ 猫好きだからって、舌も猫舌なの？」

「違います！ 普通に熱いんです！！」

暑い日の犬のように舌を出して、手で風を送って舌を冷ます。

一部始終を見ていた亜莎は、警戒して息を吹きかけて冷ましてから食す。

しかし、それはあくまで外側の話。

もういいかなと一口で頬張り、噛んだ瞬間に中の暑さが口中に伝わる。

「あふっ、あふっ、あふひでふう！」

案の定、冷めたと油断した亜莎はたこ焼きの罌に掛かってしまった。

「はい、飲み物」

「ど、どうみよ」

この事態を予期していたかのように、ついでに買っておいた飲み物を手渡す。

受け取った亜莎は四苦八苦しながら、教わった通りに蓋を開けて中身を飲み干す。

「はあっ、はあっ。口の中が火傷するかと思いました」

「恐るべき、天の世界のたこ焼きとやら」

「いや、それほどの物じゃないからさ、たこ焼きって」

このツッコミで経験値を取得、一刀のツッコミレベルが六に上がった。

「それにしても、こちらには色々な種類のお猫様がいらしゃるんですねえ」

毛の長いから短いまで、模様も様々。

種類で餞別したら、それはもうキリが無いほど。

今の明命の夢は、全種類の猫に囲まれて過ごす事だ。

無茶にもほどがある。

「はうああ……お猫様布団……」

「駄目だこの猫好き、早くなんとかしないと」

「一刀様？」

このネタが分からない亜莎は首を傾げつつ、少し冷ましたたこ焼き

を頬張っていた。

というより、本当にこの小さい体のどこに入っているのだろうか。

「そんなに食べて大丈夫？」

「大丈夫、と言いたいところですが、さすがに甘くないのでそれほど食べられませんね」

それはつまり、甘い物ならまだまだ余裕という事だろうか。

甘い物は別腹とよく聞くんが、亜莎の場合はそれが桁外れに高いのだろう。

「……お金渡すからさ、食べたかったら大判焼き買ってきたよ」

「い、いいんですか！　で、では失礼します！！」

差し出した数枚の千円札を受け取り、嬉々として買いに行く。

普通なら一枚で事足りるが、甘い物好きの彼女の事だ、相当な数を言いそうなので数枚渡しておいた。

どうせこれは貂蟬がくれた資金の、ごく一部に過ぎないのだから。

「帰ったら歯磨きさせないとな」

「させないとどうなるんですか？」

「虫歯って言って、歯に穴が空く病気？　になる」

「は、歯に穴が！？」

想像しただけで怖くなったのか、両手で頬の上から歯を押さえる。そこへ大量の大判焼きを買ってきた亜莎が戻ってきた。

「ただいま戻りました。明命も食べ……」

「亜莎！　歯を、歯を磨いてください！！」

「いきなり何事ですか！？」

二人のやり取りを見た一刀は思った。

やばい、このコンビからかえば面白いかも、と。

さんざんツツコミをさせられたのだから、これくらい構わないだろうと一刀は動き出した。

「か、一刀様、歯に穴が空くというのは本当ですか!」

「うん。この世界じゃ甘い物を食べる子供に多いんだけど、治す時はどうするか聞きたい?」

「ど、どうするのですか?」

「真桜の使っている武器を凄く小さくしたような物で、歯の悪い部分を削り取って無害な物で穴を埋めるんだ」

それを聞いた途端、二人の表情が青ざめた。

小さなドリルで歯を削られるのを想像し、夏だというのに震えている。

「そそそ、それは痛いですか?」

「基本的に痛くないよ。あつ、痛い時もあるか」

どのくらい痛いのだろうか、二人がそれぞれ想像する。

「俺は感じた事が無いけど、傷口に塩を刷り込むより何倍も痛いかも」

『ひひひひっ!』

具体的な痛みの例に、一瞬だがムンクの叫びのような表情になる。

傷口に塩をすり込む痛みは、誰しも想像のできること。

それを超えるとなると、現代人ではない二人に理解できるはずがない。

「も、もしも、放っておいたら？」

「最悪、歯を引っこ抜くことになるかも」

引っこ抜くというフレーズに、二人の魂が抜けかける。

歯を引っこ抜くのは、いつの時代でも共通の恐怖だろう。

「大丈夫だよ。麻酔っていう、痛く感じない薬を使うから」

「そうなんですか？ ほっ、よかった」

「注射器っていう医療器具で、小さい穴が開いている針を歯茎に差して、直接薬を注入するんだけどね」

最近はその方法を取っているのかは不明だが、反応が面白そうなのでそう言ってみた。

すると二人の視界がブラックアウトして、声もなくベンチの背もたれに身を預けた。

正確には気絶してしまったのだが、周囲には背もたれに寄り掛かったようにしか見えない。

ベンチに座っていたのが幸いだった。

「くくくつ。やっぱり面白いなあ、この二人の反応」

微かにSに目覚めつつある一刀を、止める者はここにはいない。

向こうだったら、今頃詠辺りが止めに入っていただろう。

だがここは現代なのに加えて、他に外史から来た人はいない。いわば、一刀の完全テリトリー状態。

「二人が現代にいるうちに、もうちょっと楽しませて貰おうつと」

この後も所々で二人をからかいつつ、街中を観光する。

野良猫を見つけた明命が暴走し、恋から聞いたドラ焼きに興味を示す亜莎。

途中の大型ペットショップで、お猫様をこんな狭いところに入れるなんてと明命が爆発しそうになったが、それは事前に防がれた。

「ふう、やっぱり予想通りの反応だったな」

「あ、あの、明命は大丈夫なんですか？」

「大丈夫、「眠」のモチカラで眠ってもらったただけだから」

モチカラで眠った明命を背負って、店員さんに睨まれないうちに退散する。

明命が目覚めたのは、一刀の家の前だった。

「ふああ……。まだ眠いです」

起きたばかりで欠伸を漏らす姿に、亜莎は苦笑いを浮かべる。

本人は気づいていないようだが、眠った原因を知っている彼女は伝えるべきか悩んでいる。

悩んだ挙句、結局伝えないのだが。

「眠いのなら、部屋でもうちよつと寝てきなよ」

「あふ……。そうさせてもらいます」

眠気交じりのフラついた足取りで一刀の部屋へと下がる。

「それにしても、こんな可愛い子があの呂蒙とはね」

「わ、私はこちらでは、そんなに有名なんですか？」

「そりゃあね。こっちの歴史では亜莎が関羽を討ち取ったんだもの」「わわ、私が関羽さんをですかあ!？」

武官から身を引いた自分が、武一筋に生きた関羽を討ち取る。それこそ夢のようで、非現実的に思えてしまう。

しかし全ては、歴史が物語っている。

本当だと言って、父親が持っている三国志の本を読ませると、本人が一番驚いてくれた。

「ほほほ、本当に私が……はう」

「あらあら、感激の余りに気絶しちゃったわ」

「違うよ母さん。信じられない事実に失神したんだよ」

倒れて目を回す亜莎に喝を入れて正気に戻し、会話を続ける。

「信じられないですが、記録がある以上は本当なんですネ」

「そうさ。だけど俺は、今の亜莎自身も高く評価しているよ」

「ふえっ？ な、何ですか？」

「これまで自分を支えてきた武を捨てて、新たに文の道に来て結果を残しているんだ。充分に評価に値するよ」

武を鍛えた上で軍師を目指して文を鍛える。

かといって、決して武の腕も落ちてはいない。

そして文でも実力を発揮し、ちゃんとした結果も残している。

これが俗に言う、文武両道というものだろう。

考えてみれば、あの世界で文武両道を成立させているのは亜莎だけではないか。

華琳は頭も良くて武力もあるが、やはり本物の武官には敵わない。

それは呉の軍師である冥琳と穏も同じ。

武力があるといっても、所詮は自衛のためのもの。

本格的な武官としての修行は、一切積んでいない。

同様に、主だった武官の中にも文で目立つ者はいない。

雪蓮も武力は武官をはるかに越えるが、文の方面がもう一つ。

白蓮や斗詩辺りは両立させていそのだが、どちらもまだ甘い。
そう考えると、文武両道で結果を残しているのは、やはり亜莎だけ
ということになる。

「ひよつとすると、亜莎ってあっちの世界で唯一の文武両道？」

「ふえ？ 何の事です？」

「いや、別に」

これを伝えたら華琳が欲しがりそうだなと考えながら、母親が出し
た水羊羹を口にする。

ちなみに水羊羹も気に入った亜莎が、一本分を丸々完食したのは言
うまでもない。

大人しい二人の賑やかな一日【現代】（後書き）

普段は大人しい二人の、賑やかな現代話をお送りしました。
次回も現代編です。

お詫びとご報告

皆さん、だいぶログインしてなくてすみませんでした。

実は先日の地震の際、家は無事でしたがパソコンが被害にあって使えなくなってしまったんです。

なので、現在は家の近くにある、最近営業再開したネットカフェからログインしています。

ちなみにパソコンですが、机から落ちていた上に本棚の下敷きになっ
ていて、ものの見事に壊れていました。

さらにパソコンに刺しっぱなしだったUSBまでもが被害に……。パソコン内には、現在連載中の「転生無双」と「萌侍伝」の二作品に関する細かい綿密なプロットが保存してあったんです。

しかもバックアップ用のコピーデータは、刺しっぱなしだったUSBに保存していて……。

皆様のご指摘や、それを踏まえた上で手を加えた今後の展開なども細かく書き記していた分、このデータがバックアップも失われたのは痛いです。

二作品に関するプロットを、全てパソコンとUSBに保存していたのが仇になりました。

何より、プロットのデータが失われたために、今後の作成が無理になりました。

なんとかできないかと手は尽くしましたが、無理でした。

内容を記憶していればよかったのですが、細かく、二作品分の膨大な量だったのでとても覚えていません。

書くこと自体は少々古い型ですがノートパソコンが残っていますし、投稿はネットカフェで問題ありませんが、肝心要のプロットがありません。

大元となるプロットが失われた作品の今後の展開では、読者の皆様の期待に添えられるとは思いません。

なので、心苦しいですが「転生無双」と「萌侍伝」の連載は停止とさせて頂きます。
誠に勝手ながら、本当に申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6063p/>

恋姫†侍 萌侍伝

2011年3月27日19時02分発行